ブレイクブレイド～力をもつ異端者～

sugarless

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ブレイクブレイド～力をもつ異端者～

【Ｎコード】
Ｎ２２７３Ｓ

【作者名】
ｓｕｇａｒｌｅｓｓ

【あらすじ】
人々の生活は石英から成り立っていた。人々は強弱はあれど、石英を操る能力を持っていた。これは、そんな世界の人々の物語。
～クルゾン大陸、そこには大きく分けて３つの勢力があった。西側にある軍事大国「アテネス連邦」、中央部にある王国「クリシュナ王国」、東側にある宗教国家「オーランド」、舞台はクリシュナ王国のある農村から始まる。そこで生まれたシリル＝ラカンと名付けられた赤ん坊。前世の知識を持つも、文化の違いからそれらをほとんど活用できない彼はこの世界でどのように生きていくのか？～

プロローグ（前書き）

このお話は原作ブレイクをしまくる予定です。
また、主人公がかなり強くなるとおもいます。
独自設定も多いとおもいますので、原作を大事にしてる方は気分を害すると思います。
そんな作品でもかまわないという方はどうぞ見ていってください。

プロローグ

起きたら知らない女性の顔が目のまえにあった。

「・・・あ？（ハイ？）」

・・・なんか、うまく声が出せない。しかも、誰かに抱かれている気がする。

「あら？起きたかしら？おはよう、シリル。ママですよ～」

いきなり知らない人が母親宣言しなさったんだが・・・。しかも、何故か俺をシリルと呼んでいるようだ。

「あ～？だばば？（俺はシリルなんて名前ではないですし、俺の母親はもっとおばさんですぜい？間違っても貴女のようなふつくしい女性ではありませんよ？）」

まったく、冗談きついぜ。てか、俺はこの人に抱かれているのか？・・・どんだけ！？高校生を楽々持ち上げる腕力って！？ええい！連邦のモビ〇スーツはバケモノかっ！？・・・まぁ、モ〇ルスーツではないな、うん。

「あらあら、さっきから今日はいろんな表情になるわね。あの人は従軍中だから、シリルのこんな表情を見れなくて残念ねぇ～」

どんな表情でせうか？

っていうか、ここまでくると段々理解できてきたんだが・・・俺、縮んでねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！？ｋうあせｆじこ！！？？

「・・・大丈夫かしらこの子？急に表情が抜け落ちたわね。あぁ、お腹がすいたのね」

もしや俺赤ん坊になってないか？それなら、うまく声が出ないのも納得できる。それに、名前が変わってるのも、母親が違うのも。・・・え？なんで、いきなり服をはだけさせるんでせうか？えっ？ちょっ、ま・・・。アッーーーーーーー

「今日は随分飲んだわねー。ほら、ゲップしましょうねー」

・・・俺ェ。赤ん坊の本能？みたいなのが働いて空腹感に任せてしまったｏｒｚ。ダメだ、こんな羞恥プレイなんか耐えられない。しかも、これが続くとか・・・いや、男としては嬉しいんだが、赤ん坊になったせいか、まったくそういう気分にならん。・・・なんかむなしい。何故だ、何故動かんジ・Ｏ！？・・・いささか古いか？いや、今はそんなことよりも・・・こんな羞恥プレイが続くというのなら、俺は・・・自殺する！！ふぅははは－－！！この俺をただの赤ん坊だと侮った貴様の負けだぁ！見た目は赤ん坊頭脳は大人そして行動力が並ではないことをみせてやる！！（注；混乱しています）

「あらあら、なかなかゲップがでないわねぇ～」

貴女は良き母親であったであろうが、この体がいけないのだよ！・・・まぁ、特攻はできんから、舌を噛み切るしかないのだがな。しかし、初代ガ〇ダムを知らない人が最近は増えてるよなぁ。今わかる人はどれ位いるのかな？友達でも知らない人は結構いたしな。おっと、自殺の恐怖で関係ないことを考えすぎたな。では、そろそろ覚悟を決めて・・・いざ！

ぷにゅ・・・げふっ

うん？

「ようやくゲップがでたわね。じゃあ、そろそろ昼寝しましょうか」

あれ？・・・しまったーーーー！！！赤ん坊って歯が生えてないじゃん！？・・・あれ？俺、詰んだ？・・・嫌だぁーーー！俺はそんな性癖はないんだよ！誰かー！ヘルプミーー！！

これが、シリル＝ラカンとして初めて目覚めたときのできごと

プロローグ（後書き）

処女作なもので、適切な量というのをこれから模索していきたいです。

1話　羞恥心？そんなものは磨耗したよ（前書き）

今回の話は次の話で原作キャラを出すための話しです。あと少しフラグを入れてみたり。いきなり、原作ブレイク気味です。

1話　羞恥心？そんなものは磨耗したよ

こんにちは。転生初日に自殺しようとしたシリルです。
今思えばあの時はパニックになりすぎて自殺なんて意味のわからないことをしでかそうとしたんだと思います。
あれから幾分時間が経ち、俺は6歳になりました。そして、わかった事があります。
・・・なんか石を操れます。いや、おかしくなったとかじゃなくて。なんか赤ん坊になってから石英っていう鉱石限定で操れるようになったんだよ。
しかも、これはここでは普通のことらしい。
・・・そういえば、友達に借りた漫画に似たような設定のものがあった気がするんだよなぁ。
・・・・まぁ、いずれ思い出すだろ。それよりも・・・

「シリル朝ごはんよー」

どうやら母さんが呼んでるようだ。早く行かないとな。

「今行くよー」

「おはようシリル。今日は遅かったわね？」

「少し寝坊しちゃって・・・」

とりあえず、嘘をつく。過去のことを考えてたとか言ったら心配されそうだしな。

ちなみに、父さんは俺が赤ん坊のときの従軍中に賊にやられたらしい。
詳しいことは俺が幼いからか話してくれないが、赤ん坊の時にすでに意識があったため、母さんが村人から知らせを受けたときに聞いていた。

「そう。今日はどうするの？」

「みんなと遊んでくるよ」

「あんまり遠くまで言っちゃダメよ？」

「わかってるって」

父さんはいないが、どうやら父さんは生前に結構な額を貯め込んでいたらしく、お金に困ることはないらしい。
農民になる前は軍に入っていたらしいしな。

「じゃあ、いってきまーす」

「いってらしゃい。あんまり遅くならないようにね」

転生する前の年数もいれると結構な年齢になるのだが、どうも身体に精神が引っ張られるというのは本当だったらしい。
現に自分は子供にしては少し・・・・ いや、かなり頭がいい子供だが、歳相応の遊びがすごく楽しく感じるし。

ただ、勉強の方は農村に学校があるわけでもないため、大きくなったら村を出て学校に行く事になっている。
それまでは、村にいる本が大好きな偏屈ジジイのところに行って本を読んでいる。

「おーい、シリル。あそぼうぜ」

「なにするんだ？」

「じゃあ・・・山に登ってあそぼう！」

「じゃあ、行こうか」

「途中で会った奴も誘おうぜ」

「了解」

こんなどこにでも居るような子供の暮らしはなかなかに楽しいが、せっかく前とは違う世界に来れたのだから、前の世界ではできないようなことをやりたいものだ。

「ただいまー」

「お帰りシリル。それと、夕ご飯が終わったら話があるんだけど」

「それって今じゃあダメなの？」

「ちょっと長くなりそうだしね」

「わかった」

さて、どんな内容なのやら・・・

「それで、さっきの話なんだけど・・・。驚かないでね？」

「それは話の内容によるよ母さん・・・」

自分の母ながら、こういう子供っぽいところにはどうも脱力してしまう。

「知り合いの娘を引き取ることになったのよ」

「はい？」

「だ～か～ら～。知り合いの娘を引き取ることになったの」

・・・ まてマテ待て。

「・・・ なんでいきなり？」

「・・・ それはね、お金の都合で育てられなくなったからよ」

・・・・・・ 確かに家は裕福と言っていいぐらいの金はある。

知り合いの娘だから、引き取るというのも納得できる。けど、なん

か怪しい。

「それは本当に？」

「・・・ほんと「嘘は吐かないで」っ！？」

「知り合いの娘を引き取るなら本当のことを話してほしい。じゃないと、その娘にどういう態度を取っていいか分からないから」

「・・・それは」

こうまで言いよどむってことは・・・

「・・・その娘の親が亡くなった・・とか？」

「・・・・・・・・・・」

やっぱりか・・・・。大方まだ子供だから、言いづらいとかって理由だろうな。

「母さん、俺は母さんが思ってるほど子供じゃないよ」

「そうね。あなたは小さいときから賢かったものね」

「今でも小さいけどね」

「ふふふ。そうだったわね」

少し空気が和やかになったかな？

「それで？俺は母さんからきちんと聞きたいよ」

「わかったわ」

それから俺は母さんの知り合い知り合いが病気で亡くなってしまい、その娘を引き取って欲しいと遺言を残したらしいという事を聞いた。

「そっか・・・。それで、いつ来るの？」

「山の向こうにある村からだから3日ぐらいかしら？シギュンちゃんっていう名前の娘でね。可愛い娘らしいわよ？」

「へぇ・・・・。そうなんだ」

・・・うん？シギュン・・・・・シギュン。あれ？ブレイクブレイドのヒロインじゃね？

・・・・まじかよ。なんかのマンガの世界観に似ていると思ったらブレイクブレイドかよ。

あれ、まだ完結してない上にうろ覚えだよ。

主要人物と主要な出来事しか覚えてねえよ・・・・。どうしようどうs

「・・・ル、シリル！」

「え！？何？母さん？」

「あなたがいきなり反応しなくなるからでしょうが」

声が聞こえないぐらい考え込んでいたらしい。

「ゴメン、ゴメン。なんか眠くなっちゃって」

「あら、そうね。いつも寝る時間を過ぎちゃってるわね。じゃあ、今日は寝ましょうか」

「うん。おやすみなさい」

「おやすみなさい」

さて、どうするか。ここがブレイクブレイドの世界だって断言はできないが・・・。

とりあえずは保留だな。だが、ここが物語りの世界でも俺は生きているんだ。

だから、原作なんて気にしない、自分の好きな用に生きてやる・・・

って、これじゃあ、ブレイクブレイドの世界だって認めているようなものだな。

まぁ、原作もなにもほとんど覚えてないから関係ないか・・・。

1話　羞恥心？そんなものは磨耗したよ（後書き）

かなり時間が掛かったのにすぐに読み終わってしまう。本当に他の作者様はすごいと思います。
本当は父親は出す予定だったんですが、気づいたら死んでいたｗｗ
特に後悔はしていないｗｗ
もっと文才が欲しいですｏｒｚ

2話　勘違い？あれ、おかしいな？（前書き）

早く幼少期編を終わらせて、アッサム国立士官学校編に行きたい。
あと、1、2話で幼少期編を終わらせたいです。原作はまだ、遠い。

2話　勘違い？あれ、おかしいな？

「シリル～。シギュンちゃんがきたわよ～。降りてらしゃい～」

2階にある自分の部屋で過ごしていると、母さんからシギュンが来たから部屋から出て来いと声が掛かった。俺としてもブレイクブレイドのシギュンなのかが気になっていたため、すぐに降りることにした。

「ほら、シリル挨拶しなさい」

下に降りると、そこにはまるで絹のような金髪を腰辺りまで伸ばし、シミひとつない白い肌をした美少女がいた。

「・・・・シギュン＝エルステル」

・・・どうやら見惚れていたらしい。

たしかに、ブレイクブレイドのシギュンだった。

綺麗すぎてびっくりしたがな。

「・・・よろしく。シギュン。俺はシリル＝ラカンだ」

「・・・・・・・・・・・・よろしく」

・・・やっぱり、元々感情が読みづらいのに加えて、親が亡くなったからか、随分と冷たい印象がするな。

頑張ってこの娘と仲良くなろう。

この娘が1人にならないように。

まぁ、余計なお節介かもしれないがな・・・

～ｓｉｄｅシギュン～

母が病気をこじらせて死んでしまった。
ここがもう少し大きな村だったなら医者にかかれただろうが、ここの村には医者がいなかった。
父親は私が幼い頃に死んでしまった。
これから、母の知り合いの家に引き取られるらしい。
家族はもういない・・・これからは１人で生きなければ。
悲劇のヒロインを気取るつもりはないが、元々表情をうまくだせないためか、友達もいなかった。
だから、山の向こうにある村に移り住むのに抵抗はなかった。
ただ、住む場所が変わるだけだと、そう思っていた・・・

～ｓｉｄｅシリル～

シギュンがきてから１ヶ月たった。その間、俺はシギュンと距離を縮めようと話しかけたりしたが、結果は芳しくない。
一言二言で話しが途切れてしまうのだ。
やはり、親を失った悲しみはそうそうなくならないらしい。
なにかきっかけがあればいいのだが…

「シリル～、シギュンちゃ～ん。朝ごはんよ～」

どうやら朝ごはんのようだ。自分の部屋からでて、リビングにむかう。

「おはよう、母さん、シギュン」

そこにはすでにシギュンがいた。
・・・・原作では朝に弱いような描写があったが、弱みを見せないようにしているのだろうか？
・・・・・・もっと自然に接した方がいいのかな？

「おはよう、シリル」

「・・・・・・・・・おはよう」

「シギュンは今日どうするの？」

「・・・・・・・どうもしない」

「じゃあ、みんなで遊ばない？」

「・・・・・いい」

「そっか。じゃあ、今日もついていっていい？」

「・・・・ごちそうさまでした」

「じゃあ、いってます」

返事はされてないが、外に行こうとするシギュンについていく。

「・・・・・・」

会話がないまま、いつもシギュンがきている場所についた。ここは、ひと気が少ない場所で1人になりたい時に俺もよくきていた場所だ

った。
この一週間はシギュンと一緒にほとんどここにきていた。
「なんで、いつもここにくるの？」
「・・・・・1人になりたいから」
「楽しい？」
「・・・・・・・」
・・・・やっぱり、人との関わりを持ちたくないからか。
「じゃあさ、本とかって好き？」
「・・・・・ピクッ」
・・・・・・・やはり、原作通り本が好きみたいだし、ある程度間をあけて、退屈だと感じ始めてからの、本だ。興味がない訳がない。
「俺がいつも本を読みに行ってるところがあるんだけど、どう？」
「・・・・・・・・・・・・・行く」
「じゃあ、行こうか」
「・・・・・コクッ」
・・・・・・・めっちゃ素直になったよ。

「おーい、ジジイ。来たぞー。」

「・・・・・・・おじゃまします」

「なんだ、小僧か。最近は来なかったから、もう来ないかと思ったぞ。・・・・・・珍しいな、小僧がここに友達を連れてくるなんて」

この、サンタクロースのようなヒゲをしたじいさんが、俺が学校に行くまでの間に勉強するための本を貸してくれる人物だ。

「じいさん、友達じゃなくて、家族だ」

「・・・・・・・・・・・・・家族」

シギュンが少し照れたような声音でつぶやいた。…よくみたら、若干顔が赤くなっているように感じた。

「ハッハッハッハ！そうか！家族か！じゃあ、仕方ないな。好きなように過ごせばいい。」

「ありがとう、じいさん」

「・・・・ありがとうございます」

どことなく、シギュンが嬉しそうにしているように感じた。

～ｓｉｄｅシギュン～

母の知り合いはいい人だった。

それだけならよかったが、その知り合いの人の子供が変だった。

シリルという、その男の子は一緒にいてもつまらないであろう私と一緒に居ようとする。

最初は可哀想だからとか、そんな同情だと思った。

だから、素っ気ないいつも通りの私の態度で接していれば、前の村の子供同様に私に構わなくなるだろうと思った。

けど、いくら素っ気ない態度をとっても、他の子供の遊びの誘いを何度も断っては、私と一緒に居ようとする。

最初は鬱陶しく感じた。次に不思議に感じた。その次は心地よく感じた。

会話は少ないけれど、シリルと一緒にいるのは悪くなかった。

けど、やはり素直になれない私がいた。母の死は悲しかったが、いつかは別れる時がくるのはわかっていた。

だから、引きづるような事はしていないのだが、シリルはそんな私の態度を母の死を引きづっているからだと感じているようだ。

もう少し素直になれるように努力しよう。

でも．．．まだ無理。頑張らないと．．．．．。

2話　勘違い？あれ、おかしいな？（後書き）

ええ、原作を知ってる人はこんなのシギュンじゃない、と思うかもしれませんが、この話しでは、小さい頃はこんな感じで、後々、原作の様な感じになる予定です。あんまり変わんねぇよ、って思う人は作者が表現できてないだけですｏｒｚ

3話　キングクリムゾン！・・・　え？それほどでもない？

あれから１０年ほど経った。
シギュンとずっと一緒にじいさん家で、本を読んだりしていたせいか、同年代の友達と呼べる奴らは少なくなってしまったが、後悔はしていない。
・・・そんな事よりも、どうやら、シギュンは魔動技術師という職業に興味を持ったらしい。

魔動技術師・・・このクルゾン大陸では、化石資源が枯渇し製鉄などがない文化故に生まれた職業。
人々は他の資源を求めた。そこで、注目されたのが、石英だった。
人々は自分たちの石英を操る力をオイルの代わりにしたのだ。
石英といっても様々な種類があった。
硬度の高いもの、柔軟性に優れたもの、発光するもの。
その中でも、柔軟性に優れたものを使い自由に伸縮させられる「靭帯」と呼ばれるものを作り出した。「靭帯」はカムを動かす動力源となり、様々な乗り物を生み出した。
この様に技術の新しい発展のために石英を研究するのが、魔動技術師・・・らしい。
まぁ、シギュンの受け売りだしな。っていっても、原作では、ゴウ(兵器)レムの開発者って感じだった気がするがな。

「シリル。ここなんか改良の余地があると思わない？」

「なにがだ？」

「ほら、ここの靭帯の配列を少し変えれば・・・」

「・・・ダメだ。まったくわからん」

前の世界とは技術が違いすぎて何がなんだか・・・。
石英なんかは感覚で動かせちまうから魔動技術師とか、シギュンみたいな奴しか石英靭帯の効率化だとかは考えないんだよなぁ。
しかも、本ってだけでも高価で手に入れづらいのに、なぜか機密のはずの石英靭帯の本があるとか、ジジイなにもんだし・・・。

「シリルも魔動技術師を目指せば？（そうすれば、一緒に働けるし）」

「うーん。俺は軍に入って魔動戦士になろうかと思ってるんだ」

魔動戦士・・・石英靭帯を用いた兵器。
その外見は人間と同じで、人間の筋肉にあたる部分に石英靭帯を入れ、その靭帯に指令を送ることで操縦者の意のままに動かすことのできる人型兵器「ゴゥレム」。その、ゴゥレムのパイロットを総称して魔動戦士という。

「・・・・・・まぁ、戦争も暫く起こってないし大丈夫かな？それに、シリルの魔動戦士適正は凄そうだしね」

「だな。まぁ、戦争が起こってもシギュンの造ったゴゥレムに乗ってれば大丈夫だろ？」

「・・・・・・（よく見ないと赤くなっているとわからない）」

この世界では、石英を誰しも操れると言ったが、当然人によって強弱がある。
現にゴゥレムに乗れるのは少数で、さらにゴゥレムの武装の１つで

あるプレスガン（空気を圧縮させて弾を打ち出す銃）を扱える者はさらに少ない。
さて、ここで問題になるのが、俺の魔力（石英を操る力）は一般的・・・いや、クルゾン大陸始まっても前例がないくらいに強いらしい。8歳の時に珍しく村の農業を手伝ったとき、農耕機を動かそうとしたら、靭帯が魔力を加えすぎたことによって、千切れてしまったらしい。
これが、大人のそれも高位魔動戦士（プレスガンを扱える魔動戦士）ならありえるらしいが、それをやったのは8歳の子供。
それからは、魔力の制御のために、小さな石英を指の上で一定の距離で浮かせるということを暫く続けていた。
・・・他にも色々やったがな。そのおかげで、今は制御がかなりのものだと自負している。
・・・まぁ、まだ16だからまだ伸びる可能性があるというのだから、我ながら末恐ろしい。

「・・・・・・これはシギュンちゃんも苦労するわな」

考え込んでいたら、いつの間にか、目の前にジジイが居て、呆れたようなため息を吐いている。

「どういう意味だ？」

「なんでもない。気にするな。ただのジジイのおせっかいじゃ」

「・・・まぁ、いいか」

「それに、お前らは2年後のアッサム国立仕官学校を受かるために勉強せなあかんしな。農民から学校に行く者自体が少ないのじゃから、がんばるのじゃぞ。」

「ああ」「ハイ」

それから2年後

「では、頑張ってくるのじゃぞ。落ちて村に帰ってくるなんて無様は晒すなよ」

「いってらっしゃい。シリル、シギュン気をつけるのよ」

ジジイと母さんが村の外れまで見送りにきてくれた。他の奴らは挨拶は済ませたしな。

「いってきます。安心しろジジイ。落ちることなんてまずないから。母さんも元気でな」

「いってきます」

俺とシギュンが別れの挨拶を済ませて村を出る。

「しかし、案外簡単に入れたもんだな」

「そんなこと言ってると、また先生に目を着けられるわよ」

でもなぁ、ほんとありえないぐらい簡単だったから拍子抜けしちまったし、入学してから半年ぐらいたった今でも、村で勉強したことが出でくるんだぜ？しかもかなりの頻度で。

「それじゃあ、次の授業に遅れないようにね」

昼を食べ終えたシギュンは魔動工学女子部に所属しているので、次の授業の準備があるため席を立つ。
その点俺は軍学部に所属しているが、未だ基礎固めなど、基本的な知識や基礎的なことしかやってないため、早く次のステップに進みたい俺としては、非常に退屈で授業をサボることもしばしば。
早くゴゥレムに乗りたいものだぜ。
今日もつまらん授業だったはずだから、シギュンには悪いがサボることにした。

「さて、今日は中庭に行って昼寝でもするかね」

というわけで俺は中庭を目指して歩を進めた

「おい、いいから手伝えよ！？」

「貴様の踏み台になるなどありえん。絶対にやらんぞ」

「だぁ～か～らぁ～。お前が俺の背中に乗っていいっつてんだろうが！！」

中庭に行くとそこには黒髪のイケメンと、くせのあるくすんだ金髪の男がいた。

・・・なにやら、木の上にいる小鳥が猫に遊ばれているため助けたいらしい。

が、もう1人が拒否しているみたいだな。

暫くその様子を見ていると、褐色の肌をした黒髪の男が現れた。

・・・・・あれ、クリシュナの皇太子だよな？

しかも、よく見るとあのイケメン、噂のアテネスの書記長の弟じゃね？

ってことは、あの金髪もやんごとなき身分か？

・・・いや、たしか前に見た「魔力なし」にそっくり、てか、本人だよな。・・・なにこの集団？しかも、全員サボりかよ・・・・・。

「はじめまして！俺の背を使うといい！」

・・・・・・・・それでいいのか皇太子？たしか名前はホズルだったかな？

「お一！話が分かるなアンタ。こいつとは大違い！靴脱ぐよ。俺はライガット。あんたは？」

「ホズルだ。あー、そのままでかまわんよ。久しぶりに制服洗うつもりだったしな」

「悪いな。肩車頼んだほうがいいか？」

「いや、それはお互い気持ち悪いからやめよう」

「わはははは！」

いやいや、「わはははは！」じゃねぇよ、ライガットさんよ。
てか、気づいてんなら止めろよ書記長の弟よ・・・なんで静観してんの？
てか、そんな事考えてる間に皇太子の背中踏み付けちゃったよ、ライガット君！？

「そいつは黒ミミズクのヒナだな。これからどんどん黒くなるぞ」

「ほー、詳しいんだな」

「ライガット・・・今踏み台にした男・・・・・貴様の国の次期国王候補だぞ？」

「いッ！！？」

書記長の弟がついにネタバレしたようだ。

「・・・陛下・・・エ・・・ト。これを献上しますんで。なにとぞ寛大な・・・なんたら・・・・・・」

・・・・・・ダメだ。面白すぎる。さっきから我慢してたが限界っぽい。

「まったく。自国の王子の名前すら知らんとはな・・・」

「ハハハ」

「うるせいよ！ゼス！」

「ぷっ、はあはははははあっはっはっはっはっはは！！！」

「「「・・・・・・ビクッ！？」」」

「はあ、はははは！可笑しすぎだろ！」

～ｓｉｄｅゼス～

いつも通り、ライガットのバカがなんかはじめた、あのバカは自国の王子だと知らずにとはいえ、足蹴にしてまでヒナをたすけた。
呆れてなにも言えんが、バカにしているところにいきなり大声で笑われたのだ、気分がいい訳がない。
思わず不機嫌な声を出してしまった。

「何だお前は？」

「いや、ぶふっ。悪いね、書記長の弟。悪気はないんだが、端から見てたら面白すぎてな」

”書記長の弟”今まで俺に近づいてくる奴は、俺を見ずにその肩書きを通してから俺を見ていた。

今まではそう呼ばれると嫌な気分になったものだが、この男からは媚へつらう感じも、嫉妬や妬みの感じがしないからか、そこまで嫌な気分にならなかった・・・が。

「俺はゼスだ」

そうすると、男はびっくりしたあとに、満面の笑顔で言ってきた。

「俺はシリルだ！よろしくな、ゼス！」

～ｓｉｄｅライガット～

びっくりした。

いや、何がびっくりしたかって言うと、大声で笑われたのもびっくりしたが、それよりも、”あの”ゼスが”あの言葉”を言われたのに、気にせず自分から名前を言うなんて・・・。

それに、あんな無邪気に笑える奴なんていたんだな。

とりあえず、悪い奴じゃないみたいだし挨拶しとくか！

「俺はライガットって言うんだ。よろしくな、シリル！」

これまたびっくりした後に、笑顔で・・・

「よろしく、ライガット！それに、そこの皇太子さんもよろしく！」

俺に挨拶した後にホズルに挨拶するシリル。

俺が言えたことじゃないが、物怖じしない奴なのか？

～ｓｉｄｅホズル～

今日は面白いな。今まで、自分は王子として育てられてきた。
だから、同年代の友達というのに憧れていた。
ここに来れば、同年代の友達も出来るかと期待していたが、現実は教師ですらどう扱っていいのか分からずに持て余し気味だった。
そんな中で、気軽に話しかけてくる奴もおらず、入学してから半年、結果１人とも関わらずにいた。
自分は王位を継ぎたくない。
だから、落第点を取ろうとして空ばかり見ていた。けど、今日は・・・

「よろしく、ライガット！それに、そこの皇太子さんもよろしく！」

「ああ！よろしく！それと、俺はホズルだ！」

「そっか、よろしく！ホズル！」

・・・・・こいつらとは、いい友達になれる気がする。

～ｓｉｄｅシリル～

あれから、４人で学校が終わるまで話したり、色々やったが、物凄く楽しかった。
こいつらとならなにをやっても楽しいと思えるほどに。
それと、後で気づいたんだが・・・・・・・・あいつら原作キャラだよな・・・・？
・・・まぁ、いいか。楽しいし。
それと、わかったことが、ゼスと俺は同じ軍学部だったらしい。
・・・気づかなかった。違うクラスだからといっても、流石に気づけよ俺・・・。
そして、ライガットが・・・・屯田学部。金さえ払えば誰でも入れると言われているらしい。
・・・・・いいのかそれで、屯田学部。
で、ホズルが一般学部。まぁ、とにかく普通らしい。
・・・・・なにが普通なのか分からないがな。
そういえば、シギュンのこと紹介するのを忘れてた。
まぁ、暫く研究室に篭るらしいし、今度会ったときでいいか。
さて、あいつらと飯食う約束してるし、そろそろ行くか。
遅れるとライガットが煩そうだしな。

3話　キングクリムゾン！・・・え？それほどでもない？（後書き）

はい、ライガット達との邂逅が無理やりだったかなぁ？と悩んでる作者です。
できれば、意見を下さると嬉しいです。
アッサム国立仕官学校編は暫く続くと思われますが、原作まではプロローグみたいなものだと考えてもらって結構です。シギュンが影薄くなってるけど、この作品のヒロインですから！これから出番を増やしていきたいです！ええ、ホズルやライガット君には渡しませんとも。

４話　俺が裁判官、弁護士、検事の裁判を始める．．．判決は私刑しかないがな

今回はライガット達と会ってから1週間後の話です。
ネタとこの後の話の展開のためにシリル君やシギュンさんの心情を
書いてみました。

4話　俺が裁判官、弁護士、検事の裁判を始める・・・　判決は私刑しかないがな

どうも、シリルです。俺は今、愚か者共に鉄槌を下すために追跡中です。・・・・・え？意味が分からない？
仕方が無い、簡単に纏めると・・・・・・ライガットとホズルのクソ共が水泳授業をしていた、シギュンの水着姿を覗いてやがったんだよおぉぉぉぉ！！！

～ｓｉｄｅシリル～

「ったく、あいつらはゼスにグラム（この前助けたミミズク）の世話を押し付けてなにやってんだ？」

少し前に授業をサボってぶらついていたら、ゼスがグラムと睨めっこしていたので、何があったのか聞いたところ。

「西側の校舎の近くを探してみろ。そこら辺にいるはずだ」

との、ことだったので、今は2人を探しにきているところだ。

「しかし、ゼスがグラムの世話を押し付けられて、困ってたのは笑えたな」

思わず笑いが込み上げてきてしまう。今、俺を端から見たら何も無いところでニヤニヤ笑う変態さんに見えることだろう。

「しかし、どこにいんのかねー？おっ？いたいた」

見ると、木の上に陣取ってなにか騒いでる2人がいた。

「おーい！ライガットー！ホズルー！」

近づきながら、呼んでみると何故か、ライガットが驚いて木から落ちていた。

「どうしたんだ？」

「あぁ？って、なんだよ。シリルか。どうしたんだ？こんｎ・・・ハッハーンｗｗおまえもか？ｗｗ」

なんか、急にわかったような口調をしてきて、ニヤニヤ笑いながら、同志を見るような目をしてみてきた

「・・・・・なにがだ？」

「またまた、惚けちゃってｗｗ」

・・・・ニヤニヤしたまま、わき腹を突いてきた。・・・・・・・・

なんか、むかつく。

「おーい、ホズルー。シリルと変わってやってくれー」

なんか、ライガットがホズルに声をかけはじめた。

「ほら、登れって」

訳が分からないまま、木を登ってみると、そこには、なにかを覗い

ているホズルがいた。

「おっ？シリル、お前も来たのか」

こちらもまた、ライガットと同じような笑顔を浮かべていた。

「なにしてんだ？ホズル？」

「まぁ、いいから見てみろって」

そういって、渡されたのは遠くのものをみる、小さな望遠鏡みたいなものだった。

指し示されるままに見てみると、そこには・・・・・・・・・。

「いや～、実にけしからん体をしていると思わんかね？シリル君？」

なんか、声が聞こえてくるが、頭に入ってこない・・・・・・。

「さすがは、魔動工学女子部の才女、シギュン＝エルステルだとは思わないかい？」

そこには、プールサイドで順番を待っている、シギュンが居た。

他の女子が霞んで見えないほどに・・・いや、実際に見えないぐらいシギュンは綺麗にみえた。

スクール水着だとか、そんなものは関係ない。今までここまで、素肌を晒している所を見たことがなかった。いままでまったく意識していなかったとしても、こうもシギュンが”女”だと意識させられてしまうとこれから、どう接していいのか分からなくなる。

・・・・俺は、シギュンを”家族”としてみているのか、”女”として見ているのか・・・・・・・・わからない。・・・・・・分からな

くなってしまった。

「おい、なんか溺れてないか？」

「・・・筋力、運動神経が皆無という噂は本当だったのか・・・・・」

「じゃ、じゃあ、あの体のボリュームはなんなんだよ・・・・」

「さ、さぁ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・脂肪・・・・・か！」

「おい・・・本人には言うなよ・・・・・・」

・・・・・・そういえば、こいつらがこんな事しなければ、こんなに悩まなくて良かったんじゃないか？
それに、シギュンの水着姿を覗いた・・・・・・なんかムカついてきたな。

「おい、シリル？さっきから黙ってどうしたんだよ？」

「おい、大丈「フフフフ・・・・・」ッ！？」

「し、シリル、さん？」

そうだそうだ、こいつらがコンナコトをしたから。悪いことをしたら・・・・・オシオキガヒツヨウダヨネ？

・・・・・・・・・ススススッ（逃げようとする音）

「・・・・まぁ、マテヨ。」

「「ビクッ！！」」

「君達はやってはいけないことをした。つまり罰が必要だ」

「し、シリル？ど、どうしたんだよ？」

「判決・・・・・・・・・私刑」

ダッ！！（2人が全力で逃げる音）

「待て、ゴルァ！！！」

「なんでそんなにキレてんだよ！？」

「聞く耳持たん！！おとなしく捕まれ！！！」

「「イヤだッ！！！！！！！！」」

結局あの後、ライガット達を捕まえ、ＯＨＡＮＡＳＨＩをした。
まぁ、見かねたゼスが仲裁に入ってなかったら、もっと続いていたがな。

「で？まだ飯食いに行かないのかよ？」

ライガットが聞いてくるが・・・・・遅いな。

「まぁ、待て。もう来る筈だから」

そう言って、ライガットを待たせる。

「・・・・？来るって、何がだよ？」

「それｈ「お待たせ、シリル」お？来たか」

「「ん？・・・げっ」」

シギュンの姿を見たライガットとホズルが驚いていた。

「・・・何？あなた達は？」

当然、そんな反応をされて面白いわけが無いシギュンは不機嫌になる。

「シギュンが研究室に篭ってる間に友達になったんだ」

「おい、シリル。知り合いだったのかよ？（コソコソ）」

「ん？まぁな」

なんか、ライガットが聞いてきたが、構わずシギュンに３人の紹介する。

「この金髪のバカが、ライガット」

「バカって、なんだよバカって！」

なんかバカ(ライガット)が叫んでるが、気にせず紹介を続ける。

「で、この色黒ノッポがホズル」

「・・・・・シリル。それはあんまりじゃないか？」

なんか、ノッポ(ホズル)が言ってくるが、気にしない。・・・・・まだ、許した訳ではないのだ。

「で、この無口なのがゼスだ」

「・・・・・・・・・」

「・・・・そう。よろしく。（久々にシリルと会ったのに、なんかいる）」

「さ、挨拶も済んだことだし。飯食いに行こうぜ！」

そう、声をかけ、移動を促す。

「そうだな。じゃあ、早く行こうぜ。あと、シリル！バカって言う奴のがバカなんだぞ！バーカ！！」

「そうか、じゃあ、お前はバカだな」

「あ！ゼス、てめぇ！今まで喋んないと思ってたら、開口一番にそ

れかよ！？」

「ふぅ・・・・・・」

「・・・・こいつ」

「まぁ、落ち着けお前ら」

なんか、ライガットとゼスが漫才をして、それをホズルが宥めていた。

そんな3人を眺めていたが、そうするとシギュンと2人になる訳で・・・・

「・・・・・ねぇ」

ビクッ

「・・・・ん？なんだ？」

昼間の事があったので、どう接していいのか、分からずにいた俺にいきなり声をかけてきたため、かなり焦った。

「・・・・？まぁ、いいわ。それよりも、あの3人と一緒にいて楽しい？」

そんな俺の反応を怪訝に思ったようだが、流してくれた。

それよりも、話題に困っていた俺は、これ幸いと、この話題に乗っかった。

「ああ！あいつらと騒いでるとすごい楽しいよ！」

それからは、この1週間4人で何をやったかを喋り続けた。
それをシギュンが少し寂しそうに聞いてるのも気づかずに・・・・・

～sideシギュン～

今日は水泳の授業があった。運動が苦手な私はあまり動くのは好きじゃない。
・・・・・人間は泳ぐようにはできていないだけなのだ。決して、かなづち、というものではない。
そんな、憂鬱な日だが、手が離せなかった研究がひと段落し、1週間ぶりにシリルに会えるのだから、目を瞑ろう。

シリルとの待ち合わせ場所に行くと、そこにはシリルの他に知らない男達(邪魔者)がいた。

「それh「お待たせ、シリル」お？来たか」

シリルに近づき、声をかける。

それからは、3人を紹介され、一緒に食事を取ることになった。・・・・できれば、2人っきりが良かった。
食堂に向かう途中、どこかぎこちなかったシリルだが、3人について聞くと、無邪気な・・・それこそ、子供のような笑顔で楽しそうに、この1週間あったことを喋っていた。
・・・・よっぽど馬が合ったのだろう。そのような友達が、シリルにできた事を喜ぶ私がいる反面、どこか寂しく思っている私がいた。
いやな考えなのだろうけど、どうしても3人を疎ましく感じてしま

う私がいるのを止められなかった。

４話　俺が裁判官、弁護士、検事の裁判を始める．．．判決は私刑しかないがな

ええ、シリル君は１２年以上も身近に、あんな可愛い娘がいたにも関わらず、全く異性としてみていませんでした。今回、漸く意識し始めたということですね。

．．．．．自分で書いていたのに、シリル君に殺意を覚えたのはお兄さんとの秘密だよ？

では、また。

5話　そして友人達は暗躍する・・・・え？大袈裟すぎる？

こんにちは、シリルです。最近悩みがあります。

シギュンとライガット達の顔合わせから、２ヶ月ほどたったのですが、どこかシギュンとライガット達がぎこちないのです。

俺とは、いつも通りなのに、ライガット達が関わると急に口数が減るのです。

やはり、女の子が男の集団に混ざるのは無理があったかな？

でも、原作では４人でいた描写もあったしなぁ。

俺が関わったことで、なんか変化がおきたのか？

わからない・・・・・けど、このままじゃなあ。俺もこの前からシギュンを妙に意識しちゃうから、早くどうにかしないと。

～ｓｉｄｅライガット～

「これより、第一回不感症女（鈍感女）と無自覚男（天然ジゴロ）を３人でくっつけてやれ、会議を始めたいと思います」

俺はシリルとシギュンを抜いた３人で、作戦会議を行っていた。

「あー、ライガット？一体何をするつもりなんだ？」
「ふっふっふ。いい事を聞いてくれたね、ホズル君」
ホズルが説明を求めてきたので、説明を始める。
「これは、なかなかくっつかない、シリルとシギュンをくっつけてやろう、という作戦だ！」
「そのまんまだな」
なんかホズルとゼスが呆れてるようだが、気にしない。
「それで？一体何をするつもりなんだ？」
驚いた。ゼスは乗り気じゃないと思っていたのに。
「ゼスは参加するのか？」
「そんなに意外か？」
「まぁ、な」
「俺にも心に決めた女性がいてな。なんとかしたいとは思っていたんだ」
「へぇー」
って、心に決めた女性がいる？

「「えええええぇぇぇぇぇぇぇぇ！！？？」」

「ッ！？うるさい！！耳元で叫ぶな！！」

いや、だってなぁ？

「ゼス？初耳なんだが？」

俺も隣で頷いておく。

「そうだったか？まぁ、今はシリル達のことだろう？」

ハッ！忘れてた！危ない、危ない。

「危ねぇ、危ねぇ。忘れてたぜ」

「いや、忘れちゃダメだろ」

なんか、ホズルが言ってくるが気にしない。

「それで？どういう事を計画してるんだ？」

「なにも考えつかなかった」

「「ハッ？」」

「いや、どうにかしなきゃいけないとは思っていても、具体的な案はさっぱりだ」

また、呆れられた視線を2人から頂いた。

「だって、2人もシギュンのシリルと2人にさせろオーラを感じてるだろ？」

俺の言葉に2人が苦笑いを浮かべる。

「まぁ、あそこまで態度を変えられればな」

「そもそも、気づいてないのはシリルだけじゃないか？」

「いや、あいつはそこまで鈍くは無い。大方、女が1人だからとか考えてるんじゃないか？」

ゼスとホズルは2人で考えを述べているが、作戦を考えて欲しいものだ。

「それで、だ。それを踏まえた上でなんかいい案は無いか？」

「「うーむ」」

まぁ、そう簡単にはでないか。

「もう直接シリルに言ってみたらどうだ？」

簡単にでないと思っていた矢先にゼスから案がでた。

「直接って、一体なにを言うつもりなんだ？」

ホズルがゼスに俺も疑問に思っていたことを聞いた。

「いや、シリルを見ていて思ったんだが、あいつは自分の想いが良く分かってないんだと思ったんだ」

「どういう意味だよ？」

「あいつは、シギュンとそれこそ家族のように長い間一緒にいたんだろう？」

「たしかに、そんなような事は言ってたな」

「だからこそ、あいつはシギュンへの感情を家族としての愛情か異性としての愛情か判断がついてないんだと思う」

「「あ～」」

思わずホズルと2人で納得してしまった。

「だからこそ、シリルにその間違いを気づかせるようなことを言えればいいんだが・・・・」

「どうしたよ？ゼスの案でいいんじゃねぇの？」

「俺も賛成だが？」

俺は異論はないし、ホズルも賛成している。

「・・・・どうやって納得させよう？」

「「「うーん」」」

・・・・・・・・・・・・い、意外と難しいな。

ガチャ

「なんだ、3人ともライガットの部屋に集まるなら言ってくれよ」

「し、シリル」

「ん？どうした？」

シリルに見つかったので、今日の会議はここまで、っていうアイコンタクトを2人に送る。

「「コクッ」」

「？」

「よし！んじゃあ、なにすっか？」

～ｓｉｄｅシリル～

俺がライガットの部屋に入ったときは、なんか変な様子だった3人だが、今はいつも通りだ。一体何だったんだろうか？

「お？歩兵いただき」

「んな！？くそう！じゃあ、俺はゴゥレムを3マス前進させて、偵察兵をとるぜ！」

今はライガットと2人でチェスのようなゲームをやっている。

これは、俺があまりの娯楽の少なさに作ったもので、2人で相手の城を互いに落としあうというもので、歩兵、偵察兵、補給兵、ゴゥレムを使い相手の城を落とした方の勝ちというものだ。

ルールを簡単に説明すると、まずゴゥレムで相手の城壁を破壊した後に、歩兵もしくは偵察兵を一定数城に送り込み、占領したほうが勝ちという、一見単純なものだ。

だが、侮ること無かれ。俺が無駄に本気を出した結果、中々に奥が深いゲームとなっている。

まず、どれを動かすにも補給が必要で、補給するには補給兵が必要だ。さらに、補給するための物資はマスごとに1ターンに得られる数が決められており、多くのマスを取ったほうが有利だ。

しかし、多くのマスを取れば防衛線が広くなり、守りづらくなる。しかも、駒は城か砦でしか生産できない。砦は元々、マス上に設置

されているものか、膨大な物資を使い、建設するしかない。
まぁ、これ以上説明するとなると、かなり長くなるので、ここら辺でお終いにしておく。
「残念。そいつは囮だ。ゴゥレムを1マス右に、2マス前進。プレスガンで破壊だ」
「ぬぅうぁあああ！！」

「ほい。占領」
「・・・・ま、負けた」
まぁ、結果は俺の圧勝だ。ライガットには今まで負けたことがないぜ。
「しかし、相変わらずよく出来たものだな。このゲームは。シリルが造ったのだろう？」
ゼスが褒めてきた。
「まぁな。あまりにも暇だったからな。まぁ、相手はシギュンしかいなかったが」
俺がそう言うと、3人がハッ、っとしたような顔をした。

「どうした？なんか忘れてたことでもあったか？」

「い、いや。なんでもないぞ？それよりも、今度はおれとやらないか？」

「そういえば、ホズルとはやったことなかったな」

「だな。手加減してくれよな。ルールもまだ、あまりおぼえてないんだから」

「さぁ？どうしようかな？」

しかし、たまにはこういう風にみんなで、ゲームを囲むのも悪くないな。今度は多人数でやるためのものを造るかな？

（（（シリルとシギュンをどうするかわすれてた！！！））））

あれから暫く経ち俺達は2年生に進級した。ライガットが追試に引っかかって、みんなで勉強を教えたりと色々あったが、なんとか全員で進級できた。誰1人として欠けることなく進級できて嬉しい。この1年も楽しくありますように。

「さて、次はゴゥレムの実習だったかな？」

そして、2年になったことによって、ゴゥレムの実機練習があるの

だ！実際に人型兵器に乗れるというだけで、かなりテンションがあがっている。

「いや～、たのしみだなぁ」

ただ、ゼスとはまたクラスが違ったので、そこはかなり残念だ。

「よーし！お前ら集まったな！？」

なんか無駄に声がでかく、暑苦しい教官がいる・・・・。

「では、まずはじめ・・・・・」

なんか自己紹介しているが、暑苦しいから修造でいいや。

「私は・・・うんたらかんたら」

なんか自慢が始まった・・・・・・うぜぇ。はやくゴゥレムに乗せろや。

「教官！ゴゥレムに乗らないのですかー！？」

なんか生徒Ａが言ってくれた。正直、あのタイプの人間は苦手だったので、ありがたい。

「む？そうか。なら、順番に並んで乗ってくように。１人５分までだ」

案外物分りはいいようだ。その言葉を聞いて、みんなわれ先へとゴゥレムに群がっていった。

「まぁ、俺は最後でもいいか・・・」

3台あったゴゥレムの内の1つに並ぶ。

「しかし、ぎこちないなぁ」

見たところ、ゴゥレムを動かす感覚に戸惑いがあるのだろう。全員動きがぎこちなかったり、ひざを突いたり、転倒していたりする。

「お？次は俺か」

そんな事を考えていたら俺の番が来たようだ。ゴゥレムの操縦席を見てみると、意外と簡単なつくりになっていた。

まず目に入るのが、フリーフォールとかで体を固定するための器具をさらに厳重にしたようなもので、これで体を固定して操縦するのだと見て取れる。

前面には手のひらサイズの操作石英が2つあり、そこに手を添えるだけで石英靭帯を動かして、ゴゥレムを操作できる。

他には、外の景色を映し出すためのドームのような形をした透明な石英が上半身を覆うようにある。

「しっかし、頭部の石英から外の景色を乱反射させて、内部に投射するっていうのには驚いたな」

だけど頭部の目に当たる部分から外の情報を得ているので、頭部が潰されると全く外が見え無くなるのは考えものだよなぁ。

「じゃあ、そろそろ動かしますか」

そういって、操作石英から石英靭帯を操作して、1歩を踏み出してみる。

「おおおお！！動いた！！！」

ゴゥレムを少し動かしただけで、俺のテンションは一気に上がっていった。

「次は走ってみるか！」

ゴゥレムが走り出し、操縦席を軽く振動で揺らす。

「この振動が体に響いてきて．．．．．いいなぁ」

前世ではあり得なかった人型兵器に乗れて感動していたため、思わずしみじみとつぶやいてしまった。

「じゃあ、次は格闘を．．．．「時間だ！降りてきて集合しろ！」

チッ」

あまりに楽しかったため、修造の言葉に思わず舌打ちしてしまった。

「よし！今日はここまでだ！初回だから軽く慣らしにしたが、次回からはもっと時間を取ってやるぞ！中にはシリルのように1回でゴゥレムに乗れる者がいるが、それはごく稀にいるかいないかだ！各自練習に励むように！解散！」

その言葉に各々が散っていく。中には俺に嫉妬の視線や悪意の篭った視線を向けてくる奴もいたが、俺は気にせずに校舎に向かっていった。

5話　そして友人達は暗躍する・・・・え？大袈裟すぎる？（後書き）

すいません。遅くなりました。最近リアルが忙しくてｏｒｚ
今回は早くゴゥレムを出したかったので、無理やりかな～？と思いつつ出してしまいました。
シギュンとシリルはまだくっつかない。
さすがに、いきなりくっつけるのは無理があるかと思ったので、少しくっつく原因となる話を考えてます。
次はこんなに遅くならない予定です。

6話　女の嫌がらせは怖い・・・偏見じゃないよね？

～ｓｉｄｅシギュン～

私は今、授業がないため、シリルの授業を離れたところから眺めている。

２年になって、授業が選択制になったから、できることだ。

「それにしても、シリルはゴゥレムに乗るのが本当に初めてなのかしら？」

そう思っても仕方がないと思う。

他の軍学部の人達は程度の差こそあれ、動きがぎこちないのだ。

それなのに、シリルはまるでぎこちない様子がない。

「あれ？もう終わりなの？」

私は目が悪いが、それでもはっきりと分かるほどシリルの顔は物足りないと言っていた。

「ふふ。まるで子供みたい」

そんなシリルも好きなんだけど・・・。

「さて、私も次の授業の用意をしなきゃ」

「ねぇ？あなたがシギュン＝エルステルでいいのかしら？」

私が授業の用意をしようとしていたところに、取り巻きを連れた女が目の前に立ちふさがった。

「・・・・誰？急いでるんだけど」

見覚えがなかったため、尋ねたところ・・・。

「ふん！スレイラ様を知らないなんて、無知にもほどがあるわね！」

なぜか取り巻きの1人が答えた。

「いいんですのよ。無知な輩に私の偉大さを教えるのはアルフォート家の者の務めですわ」

「「さすがです！スレイラ様！」」

・・・・・めんどくさい人達みたいだ。

「用が無いならいくから」

そう言って歩き出そうとするが・・・・

「まぁ、お待ちなさいな」

そう呼び止められた。

「・・・・・・何？」

「貴女、巷では魔動工学女子部の才女と呼ばれているそうじゃないの」

「何のコト？」

「まぁ！？白を切るおつもり？」

「そんなの知らない」

本当に何なのだろうか。授業に遅れてしまう。

「・・・・もう行くから」

「あ！お待ちなさい！！」

おそらく、苛立っていたのだろう。無視していった。

「私を無視するなんて・・・・・・・・許せませんわ」

この出来事はある意味では運がよく、ある意味では悪かったのだろう。

その翌日からスレイラとその取り巻きによるいじめが始まった。
ある時は教科書を隠され、ロッカーを荒らされ、罵詈雑言を浴びせられたりした。
「あら？エステルさんじゃありませんか。どうしたんです？お顔色が悪いようですけれども」
・・・・・白々しい。
「もう止めて欲しいんだけど？」
「なにをですの？”私”は何もしていませんわよ？」
「じゃあ、止めさせて。面倒だから」
「・・・・面倒？」
「えぇ」
「・・・・もう許しませんわ」
「何か言った？」
「私をコケにした罪は重くてよ」
結局、いじめは無くならず悪化した。
流石に手は上げられなかったが、研究レポートを荒らされた時は本気で怒りかけた。
先生に事情を話しても、私は農民出身で、向こうはアテネスの貴族。

面倒事に関わりたくないのか、相手にされなかった。
助けてよ、シリル・・・・。

～ｓｉｄｅシリル～

「初めてゴゥレムに乗った日からシギュンに会うたび、日に日に疲れていっているような気がするんだ。なんかあったんだろうか？やっぱり、俺達には言えないことなのかな？どう思う？」

「「「・・・・・・・・」」」

今はライガット達と集まって緊急会議を開いている。
議題はシギュンのことだ。

「そんなに心配なら直接聞いてみたらどうだ？」

ライガットの言う通りなんだが・・・・・

「もし、喋れないことだったら、どうすんだよ？」

「・・・・そんなに心配なら彼氏として悩みを聞いてやるべきだろう」

「ゼス。冗談はよせ。俺とシギュンは付き合ってないぞ」

「「「・・・・・・ハァ」」」

なんか、色々諦めたようなため息を吐かれた。

「・・・・もういいよな？遠まわしにくっつけるのは無理と判断し

ても」

「「異議なし」」

「何言ってんだおまえら？」

「もう、お前には直球で行くことにした」

「？？？」

「お前シギュンが好きだろう。異性として」

・・・・・・・・・ハッ？俺が誰をどうしてる？

「・・・・・・・・・ライガットさん？」

「だぁ～か～ら～！お前はシギュンを愛してんだろ！？」

「いや！そんなはずが無いだろう！？」

「「「ダメだこいつ」」」

「ひでぇ！？」

「今思えば、俺とホズルがシギュンの水着を覗いたとき、お前は嫉妬してたんじゃねぇの？」

「たしかに、あの時のシリルは怖かった」
2人して頷いているが、俺はそれどころじゃなかった。
「嫉妬。嫉妬かぁ」
なんか、その言葉が胸にすっぽりと収まった気がした。
「でも、俺はシギュンに家族として接して・・・・」
「関係が無いだろう」
「え？」
「俺もエキディナ・・・ 幼馴染がいるんだが、気づかないうちに好きになっていたぞ？」
「「・・・・・ ゼスが惚気た」」
ゼスが2人を睨んでいるが、俺はゼスの言葉を考えていた。
「気づかないうちに・・・・・ か」
3人がこちらを見ている。
「・・・ そう、だな。俺はシギュンが好きなのかもしれない。いや、好きだ」
「じゃあ、言って来い」

・・・・・・・・ハイ？

「ゼスさん？」

「好きだと気づいたんだろう？なら、早く言って来い」

「いや、ゼス。それはあんまりだろう」

「そうだぞ。もう少し心の準備をしてだな・・・」

ライガットとホズルが諌めているが・・・・

「そうだな。言ってくる」

「「シリル！？」」　「・・・ほう」

「思い立ったが吉日って言うしな」

「まぁ、シリルがいいって言うならいいけどな」

「じゃあ、早速行ってくるよ」

「え？今はまだ女子部にいるんｊｙ」

ライガットの言葉を最後まで聞かずに部屋をでる。

「・・・やべ。緊張してきた」

～ｓｉｄｅライガット～

「行ったな」

「しかし、いきなり行くとはな」

ゼスとホズルが話してるが、俺はあることを思い出していた。

「なぁ。たしか女子学部って男子禁制じゃなかったか？」

「それは、女子寮だけだろう？」

ゼスの言葉だから確かだろう。

「そっか、なら問題はな・・・・」

話している途中に俺はあることを考え付いた。
この計画を実行するなら少し調べなくては。

「クフフフフ」

「・・・・なぁ、ゼス？ライガットが危ないんだが」

「ふぅ。どうせまた、バカなことでも考え付いたんだろう？」

あれをこうして、ここをああして。フフフフ。

～ｓｉｄｅシギュン～

「ねぇ？エステルさん？私としてもこんな事をするのは心苦しいのよ？だから早く自分の非を認めて謝罪しなさいな」

「何に対して謝罪すればいいのかわからない」

「また私をコケにして！」

私の目の前でスレイラが悔しそうに歯軋りをする。

「そのすました顔が気に食わないのよ！」

そう言ってくるが、私は未だに表情を上手く作れないので、見逃して欲しい。

「気に障ったなら謝る」

「どこまでも馬鹿にして！」

最近はいつもこのパターンだ。

「これを見てもそんなすました態度を取ってられるかしら？」

急に嫌な笑みを浮かべたと思ったら、取り巻きの１人が懐から紙を取り出した。

「？？？」

「失礼ながら、貴女の部屋にお邪魔させてもらったわ」

そして、広げられた紙には・・・・

「それにしても、こんな絵を大事に鍵まで掛けて仕舞っておくなんて・・・・・」

少し幼い私とシリルが2人で本を読んでる姿が描かれていた。

「な・・・なんで・・それを」

その絵がスレイラの手元にあるとわかった私の喉が一気に干上がった。

「あら？その様子だとかなり大切なもののようね」

そんな私の様子をみてスレイラは嬉しそうな表情をする。

ただ、優越感に歪んだ顔だったが。

「か、返して」

思わず腕を伸ばす私をあざ笑うかのように、スレイラは1歩さがる。

その代わりに、取り巻きが2人掛かりで私を抑える。

力がまったく無い私にそれを振り切ることは出来るはずがなかった。

それでも、懸命に力を込めて、2人を振り払おうとする。

「は、離して。お願いだから・・・」

そんな私の様子を見てスレイラは嗜虐心が満たされたのか、優越感に溢れた顔をする。

「そうねぇ。じゃあ、”私はスレイラ様に及ぶべくも無い凡才でございます”って言ったらいいわよ」

そんなのでいいのなら、いくらでも言ってやる。

「私はスレイラ様に及ぶべくも無い凡才でございます」

そう言ったのだが、スレイラはつまらなさそうな顔をする。

「・・・つまらないわね」

「え？」

何かを呟いたと思ったら絵は破り捨てられていた。

「・・・・・・・・」

私は抑えが外れているのにも気づかないまま、覚束ない足取りで絵の破片を集める。

「そうよ！あなたのそういう表情を見たかったのよ！」

何か言っているが、私はそんな事に耳も貸さず破片を集めようとする。

そうしてると、段々と視界が霞んでくのがわかった。

「うぅ・・・シリル」

私が情けない声をあげたとき・・・・

「・・・・なにやってんだてめぇら」

私の大好きな人の声が聞こえた。

ただ、その声は私でも今まで聞いたことが無いぐらい低く、暗かった。

～ｓｉｄｅシリル～

やべぇ。迷った。シギュンが何処にいるのか分からん。

「どうすっかなぁ。このままじゃあ、シギュンが帰っちまうかもな」

しゃあない、人に聞いてくか。

「ん？なんかやけに大きな声を出してる奴がいるな」

まずはその人から聞いてみようと思って足を向けるが・・・・

「うぅ・・・シリル」

シギュンの涙声を聞いた瞬間、一気に頭が沸騰した。

「・・・・なにやってんだてめぇら」

自分でも驚くぐらい低く、冷たい声がでた。

「な、なんですの？あなたは？」

「俺が今、質問してんだ。答えろ。何をしてた？」

「べ、別に関係ないでしょう？さっさと向こうに行きなさいな」

「さっさと、答えろぉ！！！」

「「「ヒッ！」」」

俺の本気の怒気ーーー殺気に近いかもしれないがーーーに3人はまともに答えられる状態ではなくなってしまった。

「次シギュンになんかしてみろ、俺がお前らを・・・・・・殺す」

近づきながら、今までで一番低い声で脅す。

「「「は、ハイ！すいませんでした！！！」」」

そういって、3人は脱兎の如く逃げ出していった。

「・・・・シギュン。何があったんだ？」

それから、シギュンに話を聞いたところ、嫌がらせを受けていたことが判明し、1発殴っとけば良かったと後悔した。

「で、今回は部屋に侵入されて、その絵を取ってかれ、破かれたと」

「・・・・うん」

「しかし、また懐かしいものを」

その絵は、まだ俺達が村にいた時、村に来ていた画家の人にジジイが頼んで、描いてもらったものだった。
まぁ、この世界には写真が無いから、自分達の姿を残すには絵しかないからな。

「ごめん」

「なんで謝るんだよ？悪いのはあいつらだろ？」

「それでも、思い出の絵が・・・・」

「なんだ、そんなことか」

思わず苦笑してしまう。

「そんなことって」

シギュンが怒ったように言ってくる。

「い、いや、そういう意味じゃなくてだな」

告白しに来たことを思い出して、どもってしまう。

「じゃあ、どういう意味？」

未だに涙目だが、睨んでくるシギュンがかわいい。

「あぁ、なんだ。そういうことか」

「???」

今気づいた。おそらく、俺はシギュンに一目ぼれしていたんだろう。覗きのことはただのきっかけだったんだろう。家族愛を向けているはずだったのが、じつは最初から異性として見ていたなんてな。

そりゃ、気づかないわ。だって気持ちが最初から変わってないんだから。

「シギュン。俺はお前が好きだ」

「…………………………………え？」

呆然としたように聞いてくる。

「俺は、お前が、好きだ」

1字1句ハッキリと言ってみた。

「さっきの絵は残念だけど、これから今まで以上に思い出を残せばいいと思ったから、あんな言い方をしちまった。ごめん」

「………………………」

シギュンの顔が赤いのは夕焼けだけのせいではないだろう。

「俺じゃあ・・・・だめか？」

「・・・・ブンブン（思いっきり顔を振っている）」

それでも、不安になってしまい。情けない聞き方をしてしまった。

・・・・さらに顔を赤くしていたような気がしたのは、気のせいだろう。

シギュンが深呼吸をして口を開いた。

「・・・・・・こんな私でいいのなら」

その言葉を聞いて、嬉しさのあまり抱きついてしまった。

「きゃ！？」

なんか、すごいかわいい声が聞こえた。

「し、シリル」

真っ赤な顔で下から見上げてくるシギュンに俺の理性は崩壊寸前だ。

「ごめん。嬉しすぎて」

そう言って抱きしめる力を強める。

「私もすごい幸せ・・・」

そんな事をはにかみながら言ってきた。

お互いに顔を見ていたが、段々と距離が縮まっていき、やがてゼロになった。

夕日に照らされた影は長い間重なったままだった。

６話　女の嫌がらせは怖い・・・偏見じゃないよね？（後書き）

何度読み返しても悶絶してしまったｏｒｚ
こんな描写でいいのか、意見を下さると嬉しいです。
早く戦闘シーンを書きたいなぁ。

7話　バカップルとはこういうものだ！・・・・違う？

「シギュンの食ってる奴も美味そうだな」

「食べる？」

「いいのか？」

「うん。・・・・あ、あーん」

「・・・・・・・・えッ？」

「・・・・・嫌だった？」

そう言ってシギュンは悲しそうな顔をする。

「え！？いや、うれしいよ！あ、あーん」

「美味しい？」

「あ、あぁ。美味しいよ（味わかんねー！！）」

「シリルのも頂戴」

「あ、あーん」

「・・・・・・（パク）」

こ、これはかなり恥ずかしい。

「「・・・・・・・・・・・・」」

2人して赤くなって黙り込んでしまう。
でも、嫌な沈黙じゃなく、心地いい沈黙だった。
見つめ合っていると、段々とお互いの距離が縮まっていき・・・・・

「だぁ～～～！！！お前ら俺達がいるの忘れてんだろう！！？」

「煽った手前、強く言えんがな・・・」

「も、もう少し場所を考えた方がいいんじゃないか？」

いい雰囲気だったのに水を差された。
上からライガット、ゼス、ホズルの順だ。
ちなみに、今は校内の食堂で昼食を食べている。

「少し静かに出来ないの？」

水を差されたせいで、シギュンが若干不機嫌になっている。
今ではシギュンとライガット達の仲は比較的良好だ。
俺が、ライガット達に後押しされて告白したことを伝えると、ライガット達にお礼を言いに言っていたぐらいだからな。
前までのぎこちなさはライガット達に対する嫉妬だったらしい。
それを聞いたとき、嬉しくなって抱きついてしまったのは内緒だ。

「いや、静かにしてたぞ！？かなり我慢してたぞ俺ら！」

「もう少し静かにしててくれれば・・・（ボソ）」

「いや、場所を考えろよ！！？」

ライガットが突っ込んでばっかりだな。仕方ない少し助けてやるか。

「シギュン。そこまでにしておけ」

「え？」

シギュンが悲しみを含んだ驚いたような顔をする。

「ライガットは妬んでるだけだから」

「そうなんだ」

あからさまに、ほっとしたような顔をする。

最近は俺が関わると表情が出やすくなっているような気がする。

自惚れかも知れないけど、嬉しい。

「って、ちょっと待てシリル！俺は別に妬んでるわけじゃないぞ！？」

「うるさいぞ、ライガット。俺も最初はお前を助けようと思ったが、止めた」

「なんでだよ！？そこは助けろよ！」

まぁ、仕方が無い。ライガットとシギュンどっちを取るかと言われれば・・・・

「シギュンの味方をするに決まってる」

「・・・・シリル」

「・・・・シギュン」

二人でまた見つめ合う。

「・・・もう嫌だこいつら。ゼス、ホズル。お前らが止めてくれ」

「「いや、無理だろうこれは」」

そのまま、暫くシギュンと2人ーーーライガットたちもいるーーーですごしていると・・・

「ほら、2人とも。いつまでも自分達の世界に入ってないで、次の授業に遅れるぞ？」

ホズルがそう声を掛けてきた。
確かにそろそろ準備をしないとまずい時間になっていた。
しかも次はゴゥレムの実機訓練だ。
名残惜しいがシギュンと別れなければ。

「・・・・じゃあ、そろそろ次の授業に行くか」

「・・・・・・・そうね。じゃあ、行きましょうか」

2人とも搾り出すように声を出す。

「・・・お前らどんだけ愛し合ってんだよ」

「ら、ライガットやめろよ。本当の事とは言え、恥ずかしいだろ？」

「・・・・・・・・・・・・／／／／」

俺達は普通に反応したつもりだったんだが・・・・・

「もうマジで嫌だこいつら」

「今までの反動が来たんだろう。いずれ収まる・・・・よな？」

「俺は早まったのかもしれん」

なんか悟りを開いたような顔をしたライガット達がいた。

あれから、各々の授業に向かい俺もグラウンドに向かっていた。

「しかし、修造が次の授業は楽しみにしておけ、とか言ってたがなにがあるのかねぇ？」

俺は前回の授業で修造・・・お忘れかもしれないが、ゴゥレムの教官のあだ名？だ。

まぁ、その修造が次の授業は驚くぞー、とかでかい声で言ってたんだよ。

「まぁ、考えてもしゃあないか」

そう言ってる内にグラウンドが見えてきたが・・・・

「おいおい。・・・・ まじかよ」

そこには、学園の保有する全２０台のうち１６台が揃っていた。

「よぉーし！集合！！」

唖然としているうちに、修造の号令が聞こえてきた。

「とりあえず、なんでこんなにゴゥレムが、ここにあるのか聞きたい奴が、かなり居そうだから説明するぞ！」

そう言って、説明を始める修造だが簡単に纏めると・・・・。

なんか、たまにはたくさんのゴゥレムを纏めて動くところ見たくね？

←

じゃあ、この１ヶ月は時間ずらして授業しようぜ！

←

てか、前からそうしとけば良かったんじゃね？

←

まぁ、前からの伝統だったしな。

←

そんな伝統ぶっ壊しちまえ！

←

とりあえず、一ヶ月お試しだ！

←

み な ぎ っ て き たーーーーーーー！！！

的な感じらしい。
たしかに、非効率なのは気になっていたが、まさか伝統だからってだけだったなんてな。
・・・なんで誰も今まで言い出さなかったんだろう。
まぁ、ゴゥレムの搭乗時間が延びるのはうれしいから、いいけど。

「よし！では、前半組みと後半組みに別れろ！」

そういって我がクラス計３２名は２組に分かれていく。
俺は、迷わず後半にいく。

前半は人が多いため取り合いになるからだ。
しかも、俺は気に食わないみたいだからな。
まぁ、俺はシギュンとあいつらが居ればそれでいい。

「しかし、軍学部って意外と金が掛かるよなぁ」

魔動工学部と軍学部。この２つが一番金を使う。
魔動工学部は研究で貴重な石英を使ったり、研究にいちいち金を使う。

軍学部はゴゥレムの維持費や修理費。
プレスガン、剣、盾の修理費。
ペイント弾や実弾などの補充費。
上げればきりがない。

この２つの学部の赤字を補うために、屯田学部などの金さえ払えば、

入れる学部があるのだ。
他には、ホズルなどの身分の高い奴らからの援助を期待している節がある。

「まぁ、俺とシギュンは特待枠だから関係ないんだけどな」

この学園には入試で高い成績を出した者には、学費の免除や軽減といった制度がある。
俺とシギュンは学費が免除なのだ。

実際、俺達の家は金に困ってなかったため、免除じゃなくなくても出せただろうけど、さすがに魔動工学部と軍学部の２つはキツイ。

そのため、迷惑をかけたくない俺とシギュンは結構勉強した。
そのせいか、シギュンは原作よりも頭がいいと思う。
まぁ、原作とか今更だがな。

「しかし、あのゴゥレムはアテネスの”ラドゥン”のパクリだよな」

前半組みの動かしているゴゥレムを見て呟く。

アッサム王国は自分達が開発したゴゥレムだと主張しているが、どうみても、アテネスが開発したゴゥレム”ラドゥン”の外装を変更しただけのようなものだ。

「たしか、名前は”ヒドゥラ”だったか？」

神話的に見ても、ヒドゥラとかいかにもパクった名前つけてるしな。

「よぉーし！前半はすぐにゴゥレムから降りろ！」

「お？もう俺達の番か」

そんな事を考えている内に前半は終わったみたいだ。

「さて、さっそく乗りますかね」

そう言って、４と肩にペイントされたゴゥレムの搭乗口に身を滑らせ、固定機で身体を固定して準備を終了させる。

「さて、今のうちに武装を確認しときますかね」

まず、プレスガンが１丁。
石英の周りを布で幾重にも巻いた模擬剣が１つ。
盾が１つに、予備マガジンが１つ支給された。

「後半組みは模擬戦を行う！」

修造の言葉にマガジン内に入っている弾はペイント弾だと推測する。
前半が実弾での射撃訓練をしていたから、俺達もそうだと思っていたが違うらしい。
俺達は次回に射撃訓練をし、前半組みは次回模擬戦をするみたいだ。

「今回はバトルロワイヤル形式で進める！自分以外は敵だと思え！」

「ちょ、それは・・・・」

「では！始め！！！」

さて、問題です。

俺は自分で言うのもなんだが、成績が良く、ゴゥレムの扱いが上手い。
そんな奴で、おまけに皆からは気に食わない奴だと思われている。
そんな奴が敵にいます。さぁ、あなたはどうする・・・・？

「「「「「「「「「「「「「死ねぇぇえぇえぇええ！！！シリルぅぅぅううう！！！」」」」」」」」」」」」」

はい。こうなります。
皆見事に俺しか狙ってません。

「やべぇ。15対1とか、それなんて無理ゲ？」

全員が俺に向かってプレスガンを撃ってきたので後退して、遮蔽物に身を潜めた。
周囲の状況を確認すると、大小様々な人工的な遮蔽物がランダムに置かれていた。

「行動範囲はせいぜい1キロ四方か・・・・厳しいな」

さすがに、いくら生身で大きく感じるグラウンドでも、ゴゥレムに乗ると手狭に感じてしまう。

「このプレスガンの有効射程が150m程しかないのが救いだな」

これが性能のいいやつだったらもう少し射程が伸びるしな。

「敵は・・・３台が５隊に分かれたのか」

そんなに組織だって行動するなんて・・・・俺どんだけ嫌われてんだよ。

「あの野郎。俺達のシギュンさんを誑かしやがって・・・・許すまじ！」

「「「「「「「「「「おおおおおぉぉぉおおお！！！」」」」」」」」」」

うん？俺達の？俺のダヨ？

「さて、ＯＨＡＮＡＳＩが必要なようだ」

そう呟いて俺は行動を開始する。

～ｓｉｄｅ模擬戦の相手たち～

『ぐわ！』『くそ！』『やられた！？』

「な？！一気に３台も・・・『『『うわ！？』』』また！？」

俺達がシギュンさんを誑かしやがった、シリルのクソ野朗に正義の鉄槌を下そうと気合を入れた後に異変は起き始めた。

「くそ！もう６台もダウンだと！？一体何が起きている！？」

まずい、このままでは各個撃破される。
そう思った俺は全機を集結させるために、石英拡声器をオンにし、支持を出した。

『全機後退し、集合せよ！』

俺は自分の隊以外を障害物の多いところに行かせたことを後悔していた。

「くそ！1隊だけ偵察に出せばよかった！」

15台もいたのだから、”普通は”この方法でも問題はなかったと焦った俺は気づかない。

「おい」

「なんだ！」

自分の隊の奴に気が立っていた俺は大声で返してしまう。

「遅くないか？」

だが、そんなことを気にせずに俺が考えないようにしていたことを言ってくる。

「・・・・・・・・・」

「まさか、やられたんじゃ・・・・」

そう言ったとき障害物の奥から肩に4とペイントされたゴゥレムが

でてきた。

～ｓｉｄｅシリル～

「・・・・ふぅ」

俺は一息吐き辺りを見回す。

そこにはペイント弾でまだら模様にペイントされた１２台のゴゥレムが転がっていた。

「しかし、最後の６台が拡声器をオンにしてたなんてな・・・」

出来るだけ静かに、速く墜とすつもりだったため少し悔しい。

縛りプレイでクリア間近に失敗したような気分だ。

「しかし、被弾しないつもりが被弾しちまうなんてな・・・」

そう言って落ち込むが、ゴゥレムを見ても盾以外はペイントされていない。

「まぁ、剣は使わないでできたから、プラマイゼロかな？」

後残りは３台。

「よし、後３台。狩りにいきますか」

俺が大きな障害物が密集している所から出てみると、そこには目当ての3台が固まっていた。

「お？ラッキー。早く終わらせるか」

そう言って、ゴゥレムを前進させる。
そうして漸く動き出す3台のゴゥレム。

「遅い！！！」

プレスガンを1台に向けて撃つ。
頭と胴体に当たり行動不能と審判に判断される。
ちなみに、審判は修造を含む教官の一部がやってくれている。

1台が墜ちたのに慌てたのか、残った2台が狙いも碌につけずに撃ってきた。

「そんなもの！！！」

自身に当たりそうなやつを選択し、軽快なフットワークで弾を避ける。

「喰らえ！！！」

1台撃破

最後に残った1台にゆっくりと威圧するように近づく。

『この野朗！』

拡声器を使って叫びながら近づいてきて剣を振るってくる。
それを紙一重で避け、振り切ったところで手首を押さえ、ゼロ距離で胴体にプレスガンを放った。

「よーし！今日はここまでだ！シリルは良くやった！これからも励むように！もう私は敵わないかもしれんがな！」

そう言って修造は笑いながら解散を指示した。
俺は自分の背中に不快な視線を感じながら、ライガットたちの所に向かった。
早く自分と普通に接してくれる奴らと話をしたかったから。

7話　バカップルとはこういうものだ！・・・・違う？（後書き）

今回は独自設定がでました。
アッサムのゴゥレムが良く分からなかったので、ああいう解釈をしました。
ゴゥレムを出せたのは嬉しいんだけど、戦闘シーンが戦闘（笑）になってしまう件について。
感想を待ってます。

8話　認めたくないものだな、若さ故の過ちというものを。

～ｓｉｄｅシリル～

軍学部の所有する射撃場で、プレスガンの弾を打ち出すときに出る軽い音が絶え間なく響く。

「各自しっかりと狙いをつけろ！片手撃ちのような曲芸紛いの技はヒヨッコの貴様らには必要ない！！」

各々が自分に割り振られたレーン内でプレスガンを撃つ中、教官の声が響き渡る。

「いいか！貴様らのような下手糞が撃っても弾の無駄にしかならん！その下手糞な腕を磨いて少しでも資源の浪費を減らせ！それができん者には銃を握る資格はない！！」

かくいう俺もレーンの中におり、この授業中のみ貸し出されるプレスガンを手に持っている。俺はハンドガンタイプのものを使っているが、中にはライフル型のものを使っている奴も居る。

「5番レーンの糞野朗！どこを狙っている！しっかり狙え！！」

「す、スミマセン！」

全員がそうとは言えないが、大抵はハンドガン型を使っている奴が魔動戦士を希望し、ライフル型を使っている奴がそれ以外の軍人を希望する。ゴゥレム内に持ち込むにしてはライフル型は大きすぎるため、自然と魔動戦士が使うのはよりコンパクトなハンドガン型となる。

「よーし！今レーンの中にいる者はすぐに次の奴と変われ！」

教官の声が響き渡り、次の奴と順次交代していく。

「おい。３番レーンって、やっぱりシリルか？」

「ああ。２０メートルも離れてるのにほとんど真ん中に当てる奴なんてアイツしかいないだろう」

そんな事が小声で聞こえてくるが、流石にもう慣れた。ちなみに、今までの授業で分かったことだが、俺は大まかに分けると機動、射撃、近接の順に得意みたいだ。ゴゥレムはもちろん生身での戦闘技術もそのまんまだ。

「しかし、ここまで来ると尊敬の念が出てくるよな」

「全くだ。天才ってのはいるもんだな、って納得させられちまう」

一番苦手な近接でもそうそう遅れは取らないと自負はしているが、他の二つと比べるとどうしても見劣りしてしまう。

「しかし、天才って言えば、３組のゼスとシリルはどっちが強いんだろうな？」

「さぁ？でも、シリルには敵わないんじゃないか？」

「だが、分からんぞ。なんなら賭けとくか？」

「まぁ、やるかどうかすら分かんないからな。そんな機会があった

ら賭けるとしよう」

「お？絶対だぞ？」

しかし、途中から小声じゃなくて普通の音量になって丸聞こえなんだが、ゼスと俺はどっちが強い・・・・・・か。

今はいいが、たしかゼスはクリシュナとの戦争で前線に出てきた・・・・・はず。クソ！流石に原作知識もなにも覚えてねぇぞ！今までの勉強でそんなもの頭から追い出されちまったよ。おまけにこの世界の言葉は前のように日本語とかじゃないから今見ても理解できるかどうか怪しい。

・・・・・・くそ、ダメダメじゃねぇか俺。せめてジジイの家に古代語（日本語や英語など）の本があれば良かったんだが、なにぶん数が少ないせいか滅多な事では流出しないらしいとジジイが言っていたな。

「よし集合だ！今レーン内にいる奴も外に出て来い！」

考え込んでいたらいつの間にか後半の奴らも終わったらしいな。

集合が掛かったため駆け足で集合する。

「よし！今日の射撃訓練はここまでだ。それと連絡だが、1ヶ月後に俺達教官と生徒で模擬戦を行う。そのつもりでいるように。また、これは他のクラスとも合同で行う」

教官達との模擬戦か・・・・・教官達の実力は分からないが、そうそう遅れを取ることはないだろう。それよりも、ゼスの実力を見るいい機会かな？今後の為にもここらでしっかりと見極めとかない

とな。

それは今は置いておくか。今はゼスとは唯の友達なんだしな。さて、早速あいつらのところに行くかな？そう言えば、今日はシギュンが研究で会えないと言っていたな。・・・・・・・会えないのは残念だが仕方ない、か。

～ｓｉｄｅライガット～

「さて、作戦会議を始めようか諸君」

俺は万感の思いを乗せて声をだす。

「あ～、ライガット？今度はなにをするつもりなんだ？」

なぜかホズルが恐々と聞いてきた。ちなみに、ここにはシギュン以外のメンバーが揃っている。

「それはな・・・・」

「女子寮に忍び込もうぜ！！！」

「アホだな」　「いや、それはまずいだろう」　「俺はやらんぞ」

「何でだよ！？」

シリル、ホズル、ゼスにほぼ同時に反対された。

「お前らそれでも男か！？」

そう言うと・・・・・

「いや、シギュンにばれたら嫌だし」　「いや・・・・それは」

「くだらん」

くそ。どうする？こいつらをやる気にさせるには・・・・

「シリル・・・お前のシギュンに対する想いはその程度だったんだな・・・・・」

「・・・・・どういう意味だ？」

シリルはわけがわからなさそうに言ってくるが・・・・・

「今日は会えないんだろう？だったら自分から会いに行こうとは思わないのか！？」

「！！？？」

この反応・・・・・・いけるッ！！

「だからさ・・・・・・・会いに行こうぜ」

「ッ？！ライガット！俺は行くぞ！！」

釣れた？！案外シリルも単純・・・いや、ノッてくれたのか？

「それでこそシリルだ！ホズルも行くよな！？」

この流れで押し切る！！

「え！？いや、俺は・・・・・」

クソ！このムッツリ王子め！！

「ホズル、大丈夫。誰しもやることだって」

「・・・・そ、そうなのか？」

「ああ。だから行こうぜ」

「み、皆やることなのに俺がやらないっていうのも変だよな・・・・」

食いついた（ニヤリ

「ああ。だから大丈夫。みんなやってるんだから」

「じゃ、じゃあ行こうかな」

フィイイッシュ！！！

「よし決まりだ。ゼスはどうする？」

ゼス(堅物)に期待せずに聞いてみる。

「くだらん。射殺されればいい」

「分かった。じゃあ、行ってくるな」

予想していたことなので、大して落ち込まずに返答し、3人で部屋をでる。

～sideシリル～

「今夜行くぞ！」

外から校舎の2階にいるシギュンに向かってライガットが叫ぶ

「何しに？」

まぁ、そうなるわな。

「そこに山があるから登る・・・・・男はレジェンドを創るために生きているのさ・・・・・」

「ふぅん・・・。まぁ、変な事しないならいいよ好きにしたら？」

シギュンが困ったように言う。・・・・そんなシギュンもかわい（ｒｙ

「ホズルくぅ～ん。変な事ってなあに～？」

「か、カードだ！カードしに行くだけだぞ！！」

ライガットがニヤニヤしながら言い、ホズルがいい訳にもなってないことを言う。

「という訳で、あとは恋人同士でイチャついてやがれ！！」

そう言いながらライガットとホズルは去って行ってしまう。実際はその辺にいるのだろうが・・・・・そんな俺だが、今は木の陰に隠れています。

なんか、シギュンにこの事を報告するのが怖くて。・・・・・後ろめたいことしてる気分になるんだよ。

「シリル？」

当然恋人なんて俺しかいないためなんとなくシギュンも俺に気づいたらしい。

・・・・覚悟を決めるか。

「や、やぁ」

いきなり不自然ッ！！

「どうしたの？そんなに焦って」

どうも今の俺は焦ってるように見えるらしい。

「べ、別に焦ってないよ？」

「・・・・まぁ、いいけど。で、どうしたの？」

「シギュンに会いに来た」

なんでかこの台詞はすぐにでた・・・・

「・・・え？そ、そうなんだ・・・・」

「あ、あぁ」

シギュンのはにかみながらも嬉しそうに笑う顔に見とれて言葉が詰まってしまった。

「「・・・・・・・・」」

二人して赤くなってしまい、沈黙が場を支配する。

あれ？なんで俺ここに来たんだっけ？・・・・そうだ。ライガット達と今夜女子寮に忍び込む事を伝えに来たんだった。
早く伝えなきゃ・・・・。

「し、シギュン！」

思わず大きな声が出てしまった・・・

「ど、どうしたの？」

「今夜行くから！」

「え？」

「今夜会いに行くから！！」

「～～～～～～～～ッ？！」

そう言うと、顔を真っ赤にしてシギュンは校舎の中に戻ってしまった。

「え？」

なにがいけなかったのだろうか？やっぱり女子寮に忍び込むことは止めたほうがいいのか・・・・？

「お～い！シリル～。どうだった～？」

ライガットとホズルが遠目から見ていたのかこっちに向かってく

る。

「・・・ライガット、俺女子寮に忍び込むのやめるわ」

「な、何でだよ！？」

「どうしたんだ、一体？」

二人に理由を聞かれたため、さっきの出来事を話してみるが・・・・

「別に問題ないだろ？」

「うーん・・・行ったほうがいいんじゃないか？」

「でも、これでケンカするのも嫌だしなぁ・・・」

俺の思ってることを言ってみると・・・

「そもそも、なんで怒ってるのか分からん」

「お互いに話し合うために行ってみた方がいいんじゃないか？」

そうだな・・・・・・よし！

「・・・・・分かった。今日！俺は！女子寮に侵入するぞ！！」

「それでこそだ！シリル！！」

「お、俺はトランプしに行くだけだぞ！！」

シギュンに怒られたとしても謝り倒そう。もう最初に何を考えてたか忘れたが、ここまで来たらもうノリでどうにかするしかねぇ！！

「行くぞ野朗共！目標は女子寮！決行は今夜２１：００（フタヒトマルマル）だ！！」

「「おおおおぉぉぉおお！！！」」

「こちらシリル女子寮の前庭に侵入した。オーバー」

「おい、シリル。おーばーってなんだよ？」

「スニーキングと言ったらこれしかないだろう」

「意味わかんねぇ・・・・・・」

まぁ、分かったら怖いが・・・・

「しかしライガットそんな装備で大丈夫か？」

「大丈夫だ。問題ない」

「ちょwwおまwww」

「・・・・・・どうしたんだよシリル」

「・・・・・・大丈夫か？」

お？ホズルが振ってきたぞ。ここは・・・

「大丈夫だ。問題ない（キリッ」

（（・・・・・・大丈夫か？））

ふぅ。少し興奮してたみたいだな。もう少し落ち着かなくては・・・・・・。

「もう落ち着いたか？」

「ああ。すまんな、もう大丈夫だ」

なんだかんだ言っても俺も男なんだなぁ・・・・・・。なんとな

くシギュンに悪いと思いながら好奇心から行動しちまってるし。

「さて、最後の会議を始めるぞ」

ライガットがきりだす。

「まず女子寮は前庭、門とその外壁、中庭、寮と大まかに分けられる」

ライガットも意外に考えるな。最後に情報に差異がないように統一するのはいいことだ。

「そして俺達は今前庭に居るわけだが、これからが本番だ。過去女子寮に侵入しようとした輩は数知れず・・・・。だが、侵入を果たした者は皆無だ・・・・」

そこでライガットの表情に真剣味が増す。

「なぜなら、門の前と外壁の周りを常に衛兵が巡回しているからだ。おまけに全員がプレスガン装備ときたもんだ」

その言葉にホズルが汗を流す。

「ら、ライガット？流石にいきなり発砲してくるなんてないよな？」

どもりながら口にするが・・・・・・

「いや、実際に過去死人が出ているらしい」

人の悪い笑みを浮かべながらそう答える。その言葉を聞きホズル

は硬直する。

「な、なぁライガット。やっぱり止めないか？」

「なんだホズル・・・・・・ビビッたのか？」

うわぁ。ウザいなぁ、あの顔は。

「・・・・・・いや。そんな訳ないだろ。むしろ簡単すぎるとつまんないと思ってたよ」

ホズル・・・・・・なんでそれで乗せられてやる気になるのかな。

「巡回が壁の向こうに消えた瞬間に行くぞ？」

「「・・・・・・（コクッ」」

ライガットの提案のはずなのに何故か俺が仕切っているが、まぁいいか。

・・・・・・今だ！壁の向こうに警備員の女が消えたのを見計ら

い三人で壁に向かって走り出す。

「・・・・・・」

「・・・・・・（コクッ」

ホズルにアイコンタクトを送り、事前に決めていた通りホズルが壁を背にし、手を組む。そこに俺が足を掛けホズルの腕の力と俺の脚力を合わせ跳ぶ。よし、あとはライガットを上に跳ばしてホズルを引き上げるだけだ。・・・・・・そう思っていたが。

「よしッ！」

俺が無事に塀の上に乗れたことに喜んだのかライガットが声をあげてしまった。

「誰だ！！」

当然そんな不振な声に警備員は反応するわけで・・・・・・

「うわ！ヤバイ！逃げろお前ら！」

「このバカッ！」

俺を置いて二人で逃げていきやがったが、そっちに気を取られて警備員は俺に気付いた様子は無い。が、ここで下に降りると見つかりそうだ・・・・・・仕方ないな、中に入ってシギュンに匿ってもらうか。

その頃のライガット達は・・・・・・・

「ゼス！助かった！」

「・・・・・・やれやれ」

「耳かすった。耳かすった」

「どうしたホズル？」

「プレスガンの弾が耳にかすった」

「すげー！見せろ！」

「ところで、シリルはどうした？」

「「・・・・・・あ」」

「・・・・・・」

何だろう凄くムカついたんだが。それよりも・・・・・・・

「とりあえず、シギュンの部屋どこだろう？」

絶賛迷子中です。・・・・・・・仕方ないじゃん！全く知らないところなんだから！

「この際ばれるの覚悟で誰か捕まえて尋問でもするか？（ボソ」

そんな危ない事を考えていると・・・・・・・

ガチャっ

「「あ」」

女子寮の廊下で～シギュンと～出会った～。

～sideシギュン～

「・・・・・・」

私はついさっきの事を思い返しておもわず顔が赤く染まるのを感じる。だって、今日の夜来るって事はよ、よよよ夜這い、ってこと？

「エルステルさん？大丈夫ですか？具合が悪いようなら「いえ、大丈夫です」そうですか？」

この研究の担当講師が聞いてくるが、いつもの無表情に意識して戻して、なんとか誤魔化した。

「・・・・・・」

ダメだ、研究に集中できない。気が付くと思い返して顔が赤くなるのが分かる。今日はやっぱり早退しよう。

「すいません。やっぱり気分が悪いので、早退します」

「どうしよう」

早退して自分の部屋に入って目に入ったのは酷く散らかった惨状だった。この惨状をシリルに見せるわけにはいかない。

「・・・・・・片付けよう」

そう呟いて苦手な掃除をしようとするが、シリルの言葉を思い出しては顔を赤らめるという事を繰り返していたら、気付くと日が落ち辺りが暗くなっていた。

「どうしよう」

掃除を始める前と同じ言葉を発するが現状は何も変わらない。

「片付いてるのは机と・・・・・・ベッド」

そう呟いた時シギュンの脳内で18禁の映像が流れていった。それを想像し、顔を赤らめたシギュンは暫くそのままの体勢でいたが、妄想から覚めて外から物音が聞こえた気がして部屋を出たところ・・・・・

「「あ」」

件のシリルとばったり出会った。

～sideシリル」～

「「・・・・・・」」

いや～、良かった良かった。シギュンと会えたお陰で部屋に入れてもらったから他の人に見つかる心配も無くなったし、明日の昼ぐらいには今より警備も緩くなっているはずだし、塀の外側と比べて内側は警戒が薄いから、気を付ければばれることなく外に出られるだろう。

さて、俺がシギュンといるにも拘らずに何故自分の考えに没頭しているかというと・・・・・・シギュンが俺を部屋に上げてから自分が埃っぽいことに気付いたのか慌てて部屋に備え付けられているシャワーに入ったんだが、ここまではいい。

駄菓子菓子！いや、だがしかし！今の状況は不味い！なにが不味いって、俺もその後シャワーを借りたんだが、その時に侵入の際に土で汚れた服を洗っていたんだ、そこで気付いたんだよ・・・・・・着替えが無いって。いや、我ながらバカだとは思うがそれは今はどうでもいい。問題なのは俺の今の格好だ。端的に言うと・・・・・・バスタオル一枚巻いただけです。

やっべぇえええよ！！どうすんべよこれぇえぇえええ！！！！ベッドに並んで座るバスタオル一枚だけの男とパジャマ姿の女、しかも恋人同士とか明らかにこの後行為が待ってるよね？？！！心なし

かシギュンも顔が赤い気がするし、これはＯＫってことか？据え膳なのか？

「「・・・・・・」」

沈黙が　つ　ら　い　！！

「ね、ねぇシリル。きゅ、今日はどうして無茶して私の部屋に来たの？」

気まずさを感じているとシギュンが噛みながらも意を決したかのように聞いてきた。

「い、いやそれは」

あれ？そういえば、なんで俺は女子寮に侵入なんかしてんだ？たしか・・・・・・

「シギュンに会いに来た」

そう。たしか最初はこれが目的だったはずだ。・・・・・・途中からおかしかった気がしないでもないが。

「・・・・・・」

この言葉を聞いて今度こそ傍目からも分かるぐらい顔を赤く染めるシギュン。それを見て俺も何故か気恥ずかしくなってしまう。

「「・・・・・・」」

なんだろう？さっきと同じように沈黙が場を支配しているのにさっきとは違い、雰囲気が桃色な感じがするのは俺の気のせいか？

「し、シリル！」

「ど、どうした？！」

シギュンが急に大声をあげてきたので、思わず大声で返してしまった。

「そ、その・・・・・・私初めてだから・・・・・・や、やさしく・・・・・・・・・・して？」

顔を真っ赤にしながらそんなことをのたまってきたが、俺はそれどころではなかった。何故なら・・・・・・

「シリル？」

シギュンが心配そうに聞いてくるが、俺は自分の理性で本能を抑えるので精一杯だった。てか、やばい好きな娘にあんな事を言われて抑えきれるだろうか？いや、抑えきれるはずがない！！

「その、いいのか？俺なんかで」

最後に確認の為にそう聞くが・・・・・・

「シリルがいい・・・・・・」

アウト。

「シギュン。絶対に幸せにする。こんな俺で良かったらでいいのなら」

聞き手によってはプロポーズのようにも取れることを言うが・・・・・・・

「はい」

その言葉を聞き、思わず唇を奪ってしまう。

「ん・・・・・・はぁ、んん?!」

今までは舌を絡ませたりしたことが無かったシギュンはいきなり唇を割って入ってきた舌に驚き思わず舌から逃げようとするが・・・・・・・

「ん、ん、ふぁ、んん!」

当然その気になっている俺が逃がすはずもなく、さらに舌を絡ませるがシギュンも慣れてきたのか、おずおずとではあるが自分からも懸命に応えようとしてくれているのが分かる。

「ちゅ、ちゃぷ、はぁ・・・・・・」

お互いに顔を離すとそこにはお互いの口から透明なアーチが掛かっていた。

「はぁ、はぁ。し、シリル。やさしくしてっていったのに・・・・・・」

顔を赤らめ息を荒げながらもそう言うシギュンから目を離せなかった。

「ごめん。シギュンがあまりにも可愛すぎて我慢できなかった」

「そうなんだ・・・・・・」

照れながらも嬉しそうに言うシギュンを見て優しくできるかわからなくなる俺がいた。

「シギュン優しくできるように努力するけど我慢できないかもしれない」

そう言ってからシギュンの身体をベッドに押し倒していった。その後は明け方近くまでベッドの軋む音と嬌声が響いていたとかいなかったとか。

その後・・・・・・

「し、シリル。抜け出せたんだな・・・・・・」

「その、スマン。シリルを置いて逃げ出してしまって」
「大丈夫だったのか？」
そう聞いてくる三人組がいたが・・・・・・
「ああ。ライガット達のお陰だ。ありがとう」
その言葉を聞き妙に晴れやかな顔をしてシリルが言った。
「な、なんかよく分からんがいいって」
「か、感謝されるようなことしたか？」
「・・・・・・？」
しかし、この言葉を聞いて理解できるものはここには居なかった。
「しかし、昨日はなんで学校に来なかったんだ？やっぱり警備が厳しかったとかか？」
とりあえず、理解できないことは置いといて昨日学校に来れなかった理由を聞くライガット。
「ああ。あれは厳しい戦いだった・・・・・・」
そう感慨深く呟くシリルだが、当然ライガットの言った事に対してではなくあの夜のことに対しての感想なのだが・・・・・・
「スマン！シリル！なんでもするから許してくれ！」

「俺も出来る限りのことをするから許して欲しい」

「・・・・・・やれやれ」

「いや、別にいいって」

「いや、それじゃあ俺達の気がすまない！」

「ああ」

「だからいいって」

このやり取りはライガット達が折れるまで続き、魔動工学女子部の才女が足腰が立たなくなったために2日学校を休むことになるのはまた別の話である。

8話　認めたくないものだな、若さ故の過ちというものを。（後書き）

言いたい事もあると思いますが、まずは更新が遅れてすいませんでした。この後も部活が最後の大会に向けて追い込みに入るので、更新速度が遅くなると思いますが、ご理解の程をよろしくお願いします。

さて、今回の話ですが作者は自身の限界に挑みました。ええ、こういう話を書くのは初めてだったので、ご意見をいただけると嬉しいです。

賛否両論あると思いますが、温かい目で見守っていただけたらと思います。では、言い訳を一通り述べたところで次の更新をお楽しみに。

9話　俺は全力で戦えない・・・・・・あれ？厨二病？

ここはアッサム国立仕官学校が誇るゴゥレムの模擬戦にも使えるグラウンド。そのグラウンドでは数台のゴゥレムが模擬戦をしていたが、いつもと違いグラウンドの周りを囲むようにそびえる防壁の上では様々な学部の生徒が模擬戦を見学していた。

「なぁ、この模擬戦って教官と生徒がやってるんだろ？」

その防壁の上で模擬戦を見学していた生徒の一人が一緒に見学していた生徒に聞く。

「ん？ああ。大方、生徒に教官の強さを見せつけようって魂胆だろ？」

「なんだそれ。ただの新人いじめじゃないか。結果が見えてるなんてつまんないな」

この模擬戦の趣旨が教官達の新人いじめだと知り、あからさまにガッカリする生徒。

「まぁ待て。ただ今年はどうも妙な噂があってな」

「噂？」

「ああ。例年はただの遊びらしいんだが、今年は天才が二人も居るってんで教官連中が熱くなってるらしいんだ」

「天才？」

天才と今回の模擬戦で教官連中が熱くなる関係が分からなかったため、訝しげに聞き返す生徒。

「どうもその二人を担当している教官が二人を絶賛しているらしくてな」

「それで？」

焦らすように言うため続きを促すように聞く生徒。

「それが「アイツには勝てん」って二人をそれぞれ担当している教官が他の教官連中に言って、それを聞いた奴らがいきり立ったらしくてな。俺なら倒せると豪語してるらしい」

「まぁ、普通動かし始めて半年程度の生徒に負けるとは思わないよな」

「おそらくその教官も生徒にしては強いって言ったんだと思うんだが、噂は尾ひれがつくからな」

もちろん天才はシリルとゼスで二人なら教官に勝つことも難しいことではないのだが、それを知らない二人は所詮は噂と思い本気にはしていなかった。

「しかし今日は騒がしいな」

グラウンドに続く通路にある控え室でそうぼやくゼス。

「まぁ、仕方ないじゃないか。模擬戦が公開されることなんかあんまりないんだから」

ゼスの面倒くさそうな呟きに苦笑しながら返すシリル。

「そう言ってもな・・・・・・」

シリルが宥めるがため息を吐き憂鬱そうにするゼス。

「ライガット達にも応援されてるから無様な姿を見せられない、って緊張してんのか？」

からかい混じりに聞くシリルだったが・・・・・・

「ああ、そうかもしれない」

それを聞き驚くシリル。

「お前なら緊張なんかせずに飄々と勝ってきそうだと思ってたんだが」

「俺も驚いてるよ。・・・・・・・ 今まで友達に応援されるなんてこと、なかったからな」

ゼスが自嘲気味に呟く。シリルはそれを聞き思わず笑顔が浮かぶの止められなかった。その笑顔を嘲笑の類だと思ったのか、苦しそうな顔をするゼス。

「やっぱり情けないよな・・・・・・・」

それを聞きシリルは若干怒ったように声をあげる。

「何言ってんだ。俺達に見られて緊張するって事はそれだけ俺達を気に掛けてくれてんだろ？」

「それは・・・・・・・ そうだが」

「何時も通りやれば負けることなんか無いだろうに。・・・・・・・ 負けたりなんかしたらライガットに笑われるぞ？」

ライガットに笑われるところを想像したのか顔を顰(しか)めるゼス。

「それは・・・・・・・ ムカつくな」

「だろ？だったらライガットにお前の凄さを見せ付けてやれ」

「そう・・・・・・・ だな。アイツらに情けない姿は見せられんな。ありがとうシリル」

幾分落ち着いたのか顔に笑みを浮かべゼスが礼を言う。

「ああ。っと、そろそろお前の番じゃないか？」

話している内に結構時間が経ったのか生徒がかなりの数が減り、シリルとゼスと数名の生徒を残し控え室には残っていなかった。

「みたいだな。じゃあそろそろ行ってくる」

「ああ。負けんなよ？」

「誰が。お前こそ醜態を晒すなよ？」

シリルが挑発するように言い、ゼスが控え室の扉にむかいながらそれに返す。お互いの顔には笑みが浮かんでいた。

「さて、シリルにもこれ以上に情けない姿を見せるわけにもいかんな」

ゴゥレムの操縦席に乗り込みゼスはそう呟く。

『来ました！今噂の軍学部の二人の天才の一人がついにその力を見せ付けるのか――――？！』

実況をしているであろう生徒が石英拡声器で増幅させた声を響かせる。

『おう。ようやく来たか。ビビッて逃げたかと思ったぜ』

『『ははははは！！』』

目の前にいる三台のゴゥレムから拡声器で増幅された独特の声が響くが、とても教官とは思えないその言葉にゼスも思うところがあったのか、若干苛立たしげに拡声器をつけ応えた。

『うるさいな。いいから全員で掛かって来い雑魚ども』

『『『・・・・・・あ？』』』

当然そんな事を言われたお世辞にもいい教官とは言えない教官達がいきり立つ。

『ハッ！そんなにボコボコにされるのがお望みなら希望に応えん訳にはいかんよなぁ！』

一人が声を上げると同時に三台のゴゥレムがゼスを地に這い蹲らせんと迫る。

「・・・・・・ああ。そうだ、シリルが言うにはこういうのを、ふらぐ？と言うんだったか？」

その言葉と同時にゼスに迫っていた一台に足払いをかけ、転倒させてすかさずプレスガンを放ち、胸部装甲にペイントが施される。

『『『な？！』』』

当然それなりに腕に自信を持っていた教官は驚愕する。しかし、ゼスがそれを見逃してくれるはずもなく・・・・・・

『チッ！』

回り込もうとして硬直していた一台に向けプレスガンを放つ。だが、そこは腐っても教官である。左腕に保持していた盾で辛くも防ぐ。

『舐めるな――――！！』

プレスガンを防いだ教官が叫び、残った二台がゼスに向かってプレスガンを放つ。しかし、それをゼスは大破判定をだされ転がっていたゴゥレムの襟の部分をつかみ、盾として使い防ぐ。

『うお？！何しやがる！』

・・・・・・・まだゴゥレム内に教官が乗っていたが気にせず残っている二台の内の一台に”盾”を使いながら、狙いをつける。

『クソ！埒が明かない！』

そう言って弾切れを起こしたため、マガジンを換えているところをゼスに狙われプレスガンを破壊される。

『まだだぁ――――！』

プレスガンを破壊されたため残された武装である模擬剣を背部ラックから引き抜きながら盾を構え接近してくる。もう一台がプレスガンで接近を援護してくることもあり、なかなか狙いを絞れないため”盾”から身を乗り出し援護している方にプレスガンを連射する。

援護していた方はプレスガンと両足に大破判定がでるが、ゼスも左腕に保持していた盾に大破判定がだたため盾を破棄し、背部ラックから模擬剣を左腕に保持させる。

『もらった――――！！』

既に接近戦の距離に入っていた最後の一台が模擬剣を振り上げ叫ぶが・・・・・・

「だから、それはふらぐだと・・・・・・」

ゼス自身よく分かってないことを言いながら、右腕に保持していたプレスガンの先の銃剣部分を地面に突き刺し、振り下ろされる模擬剣を自身の模擬剣で受け止めると同時に空いた右腕を相手の胴体部分に当て勢いを利用し、後方に押し上げる。

『うお？！』

地面に投げつけられ驚いてる隙に先ほど地面に突き刺していたプレスガンを拾い、寝転んだままの最後の一台に突きつける。

『終わりだ』

ゼスが拡声器で言うと同時に静まり返っていた観衆がドッと沸いた。

『すごい！天才の噂は嘘ではなかった！教官三人を相手取り余裕綽々で勝利をもぎ取りました――――！！』

解説の興奮した声が拡声器を通じて響くが、周囲が異様に騒がしいためさして気にならない程しか聞こえなかった。

「ふぅ」

ため息を吐きながらゼスが操縦席をでて防壁の上を見回すと、ライガット達が一塊になってゼスに向かって親指を立てていたり手を振っていたりした。

「・・・・・・」

それを見たゼスは少し照れくさそうに笑いながら親指を控えめに立てて返した。

「しかし、ゼスがゴゥレムに乗るのが上手いっていうのは聞いてたけど、ここまでとは」

騒がしい中でライガットは声を出す。

「確かにな。あれ程の腕前の奴はなかなかいないんじゃないか？」

一緒に観戦していたホズルがそう返すが・・・・・・

「一番強いのはシリル」

あの女子寮侵入以来さらにシリルに傾向してきたシギュンが言う。今では普通だが、あの侵入事件から一週間程はシリルに会うたびに顔を真っ赤にしていたとか。

「そういえば、シリルも天才とか聞くけど詳しく知らないんだよな。シギュンは何か知ってるか？」

ライガットがシリルについてなら大体知ってるシギュンに聞くが・・・・・・

「私もあまり知らない。ただ・・・・・・」

「ただ？」

シギュンがシリルについて知らない事があるなんて・・・・・・と驚きながら聞くが。

「小さいころに農作業の手伝いをシリルがしたんだけど、その農耕機の石英靭帯が過負荷で千切れたの」

「おいおい。まじか・・・・・・」

「それはすごいな」

それを聞き頬を引きつらせるライガットとホズル。

「ただ、今ではある程度石英靭帯の限界を弁えてるみたいだから千切れるなんて事はないと思うけど」

一応フォローのようなものを入れるシギュン。

「お？シリルが出てきたみたいだぞ？」

ホズルがそう言った瞬間にはシギュンが目をグラウンドに移す。その様子を見て苦笑するライガット達がいたとか。

「強いな」

ゼスの模擬戦を通路にでて観戦していたシリルは模擬戦が終わったと同時に呟く。

「さて、見た感じ教官達とやる意味が見出せないことだし・・・・・」

シリルはいい事を思いついたと言わんばかりな顔をしてグラウンドに出て行く。

「うお！また一段と凄い音量だな」

廊下で聞くよりも大きく聞こえる歓声に癖々しながらゴゥレムに乗り込んでいく。

『さぁ！続くはもう一人の天才と噂のシリル君だ――――！果たしてゼス君と同じように私たちを魅せてくれるのか？！それともただの噂なのか――――！？』

実況が興奮が冷め遣らぬといった感じで声を張り上げる。そろそろ自分の提案を投げかけて見ようとシリルは拡声器をつける。

『あー、俺としてはゼスとの一騎打ちを望みたいんだが、どうかな？教官達も流石に疲れているだろうしね』

自分の望みを言いながらも教官達に逃げ道を与える。その提案を聞きテンションが上がる観客。

『おお～っと？！ここでまさかの一騎打ちをご所望のようだぞ？！ゼス君は一体どうするのか？！』

実況をしている生徒は教官にお構いなしに返事をゼスに求める。

『いや・・・・・・なぜ俺と一騎打ちなんだ？』

ゴゥレムに乗って退場しようとしていたゼスが戸惑ったように聞いてくるが・・・・・・・

『天才が二人って言われてるけど、どっちが強いか競い合いたくなってな』

シリルはゼスにそういうが、実際後々のためにここらで一戦交えときたいというのが本音だ。

『俺は構わないが』

『おお～っと？！ここでまさかの天才二人のドリームマッチが実現した～！！』

ゼスがそう言った瞬間天才二人の戦いにテンションが上がる実況の生徒。実際はシリルが強いか分かってないが、テンションが上がりに上がっている実況の生徒は気にしない。

『それじゃあ、ゼス。連戦で悪いけど相手してくれるか？』

『大丈夫だ。あれぐらいは準備運動だ』

いつの間にかグラウンドの外に出ていた教官達が、準備運動呼ばわりされて自殺するんじゃないかってぐらい落ち込んでいた。

『それでは・・・・・始め！！』

頼んでもいない掛け声をした実況の生徒の声にシリルとゼスは同

時に反応する。

「「おおおおぉぉおおお！！」」

お互いに声を張り上げながらゴゥレムを前に踏み込ませ、プレスガンを前に突き出す。ゼスが突き出したプレスガンの銃剣部分がシリルのゴゥレムの肩の装甲を半分以上吹き飛ばし、シリルの突き出したプレスガンが顔のすぐ横にそれる。

「クソ！」

シリルが後ろに下がりながらプレスガンを撃つ。それに合わせるようにゼスも後退しながらプレスガンを撃つ。

「なに？」

シリルが放った弾をゼスは回避しようとするが、両肩の装甲を半ばからペイントされる。しかし、幸いなことにどちらの腕も破壊判定はでなかった。

シリルはゼスがプレスガンを放ってくると同時にゴゥレムを横に投げ出すように移動させたため、盾が少しペイントされるにとどまっている。

「「・・・・・・強い」」

お互いが自身のゴゥレム内で同じ言葉を呟く。その胸中は自分の親友が自分に比肩しうる強敵だということに歓喜していた。

「「・・・・・・・」」

観客の騒ぎが聞こえながらも、二人はその喧騒が遠ざかっているような感覚の中ですり足をするように間合いをはかっていた。

唐突にゼスのゴゥレムが動く。その手に持つ丸い盾をフリスビーのようにシリルに向かって投げつける。

「なッ？！」

予想以上の速さで迫る盾に驚きシリルはぎりぎりのところで盾を左腕で上に弾く。しかしその一瞬の隙にゼスがプレスガンをシリルに向かって放つ。その弾をプレスガンを盾にして凌ぐが、プレスガンが大破判定を受ける。そのまま撃ち続けようとするゼスだったが・・・・・・

「弾切れか」

そう呟き給弾を始めるゼス。その隙にシリルはプレスガンを破棄し、上に打ち上げたゼスの盾を右手で受け止め保持する。

「負けるか！」

シリルのゴゥレムが両腕の盾を構えながらゼスに向かって突貫する。と同時に給弾を終了したゼスがプレスガンをシリルに向ける。

「シリル！」

シリルと真っ向から相対する事を望んだゼスは後退せずその場にとどまりプレスガンを連射し始める。

「もってくれよ」

そう祈りながらひたすらに前進する。しかし、左腕の盾が大破判定を受けたため破棄する。同時に右手を前にだす。

「「おおおぉぉおおお！」」

声を張り上げ気合を入れ、前に進むシリルと迎え撃つゼス。シリルの持つ最後の盾が大破判定を受ける。ゼスは勝利を確信したが、シリルは左腕を前に突き出し左腕を犠牲にして他の部分を守った。

「なに？！」

「もらったぁあああ！！」

シリルが勝利を確信し、背部ラックから模擬剣を右手で抜き放つ。

「くっ！」

上段から振り下ろした剣はゼスのプレスガンを打ち据え右手から叩き落す。すぐさま追撃に入ろうとするシリルだったが・・・・・・

「ふッ！」

ゼスが短く息を吐き、シリルが横薙ぎに振るってきた模擬剣を持つ手を足で抑える。その隙に右手で模擬剣を抜き放とうとする。

「ッ！！」

シリルは反射的に普段抑えている魔力をゴゥレムの右手に送って

無理やり振り切ろうとしてしまい・・・・・・

ブチブチブチッ！！！

というなにかが引きちぎれる音が聞こえてくると同時になにが起こったのかを悟る。

「ああ～あ。接近戦じゃあ敵わないか・・・・・・」

その言葉と同時にゼスの模擬剣が上段から振り下ろされ模擬戦が終了した。

「シリル・・・・・・」

「シギュンか・・・・・・。どうした？」

模擬戦が大歓声とともに終了してから時間が経ち、夕焼けが綺麗

な時間帯になった頃に学校の敷地のはずれにある芝生に二人はいた。

「その・・・・・・今日の模擬戦で落ち込んでないかな・・・・って」

シギュンは初めてと言っていい敗北にシリルが落ち込んでないか心配になり様子を見に来たようだ。

「ああ。悔しいな負けるっていうのは。ただ・・・・・・」

「ただ？」

「なんと言うか、嬉しかった。全力を出して負けて、上には上がいるって分かって」

その笑顔は少し無理をしているのが分かるが、暗い感じのしない綺麗な笑顔だった。シリルの笑顔が夕日に照らされて、さながら絵画のように映る。

「・・・・・・」

その光景に見惚れるシギュン。

「ん？どうした？」

そう聞いてくるシリルにごまかすように言う。

「ううん。ただ、シリルはあのゴゥレムじゃ全力を出し切れないでしょ？」

ここに来る前に魔動工学の生徒としてシリルが使ったゴゥレムを見てきたシギュンが言う。

「それを言うならゼスだって・・・・・・」

「右手の石英靭帯が千切れているのに？」

シリルがゼスも実力を出し切れていないと言おうとするが、ゼスとは根本的に違うと言うシギュン。

「普通はゴゥレムの石英靭帯は千切れない。ゼスだって性能が操縦技術に追いついていないってだけ。シリルの場合はシリル自体に追いついていない。

「・・・・・・」

自分でも分かっていたのか何も言わないシリル。

「・・・・・・まぁ、いいわ。それよりもライガットがゼスの祝勝会とシリルを慰める会をやるって言ってたから早く行こう」

「ぷっ、なんだそれ。一緒くたにしたらダメだろう」

シリルはライガットらしい提案に吹き出す。さらにその提案を止めようとするホズルと呆れるゼスが鮮明に想像できてツボに入った。

「はははははは！なんだそれ！」

「もう。笑ってないで早く行こう」

そう言ってシリルを引っ張り上げようとするシギュンだったが、非力な腕力では引っ張り上げることができずに倒れ込んでしまう。

「きゃ」

「おっと」

思わず小さな声を上げてしまうが、倒れ込んできたきたシギュンを受け止めるシリル。

「シギュンは大胆だなぁ」

「な、何言ってるの」

少しどもりながら立ち上がろうとするシギュンだったが・・・・・

「ほいっと」

「きゃ」

そのままシギュンを俗に言うお姫様抱っこで持ち上げるシリル。

「な、なな何これ」

お姫様抱っこの事は知らなかったのかさっきよりも戸惑った声が腕の中から聞こえる。

「さて、行きますか」

「ま、待って！降ろして！」

そのままライガットの部屋に向かおうとするシリルだったが、シギュンが待ったをかける。

「聞こえな～い」

当然シリルがそれを聞くはずもなく二人で騒ぎながらライガット達の所へ向かっていった。

その後・・・・・・

「お待ちど～さま。二名追加で～す」

「お？来たかシリル。早速はじめ・・・・・・」

「シリル？その・・・・・・シギュンは大丈夫なのか？真っ赤なんだが」

「ふぅ・・・・・・相変わらずだな」

「・・・・・・」

部屋に着くまでお姫様抱っこをされ、衆目に晒されたシギュンは羞恥のあまりぐったりしている。・・・・・・目がレイプ目に見えるのは勘違いだと信じたい。

「大丈夫かシギュン？体力あんまり無いんだから身体に力入れすぎたら疲れるだろう」

「・・・・・・」

返事がない屍（ｒｙ

「まぁ、その内復活するだろ。とりあえず乾杯！」

「「「乾杯」」」

「・・・・・・」

その後は四人で今日のことで盛り上がったり、途中で復帰したシギュンがシリルと甘い空間を創り、他の三人に砂糖を吐かせたり・・・・・とりあえずカオスだったとか。

9話　俺は全力で戦えない・・・・・・あれ？厨二病？（後書き）

どうも、ｓｕｇａｒｌｅｓｓです。

感想で三人称のほうがいいのでは？と言われたので、三人称で書いてみました。

皆さんの要望にも可能な限り応えていくつもりなので、一人称の方がいいとか、三人称の方がいいとか、文章の量が多いだとか、意見を下さると嬉しいです。

では、次の更新でお会いしましょう。

１０話　たまに子供のする遊びをすると楽しく感じる・・・・・気のせい？

シリルとゼスの模擬戦から幾分時間が経ち、シリル達は進級した。三学年になったため、ちょうど学園生活が折り返し地点にきたところだ。

「あぁ～。ひまだ～」

ライガットがだれた声を出す。

「どうしたんだいきなり？」

ホズルがライガットに聞くが・・・・・

「だってさ～最近試験対策で忙しかったからいたずらしてねぇじゃん？」

「くだらん。そもそも俺はいたずらに参加していない」

ゼスに一蹴される。

「う～～む。なんかこの面子で出来ることないかな」

ライガットはどうにか面白いことを考え出そうと唸る。

「いや、普通に今のままでよくないか？」

シリルは今のままで充分だと言う。

「それはそうだけど・・・・・・・・・・・・・・・そうだ！かくれんぼをしよう！！」

考え込んでいたライガットがさも名案のように声をあげるが・・・・・・

「「「・・・・・・」」」

「何言ってんの？コイツ」みたいな目で見られる。

「なんだよその目は！いいじゃんか童心に返って遊んでみるのも！！」

「いや、今の間になにがあったし」

シリルの言葉にホズルとゼスが頷く。

「特に考えてない！頭に浮かんだだけだ！！」

自信満々に言うライガットに苦笑するしかない三人。なんだかんだ言ってこの面子には甘くなる奴らばかりなので、急遽第一回かくれんぼ大会（参加人数四人）が行われることになった。

「よし。ルールはグラウンドから男子寮までが範囲だ。林の中とか校舎の中は禁止な」

とりあえず、簡単なルールを決める。

「じゃあ鬼決めようぜ、鬼！」

ライガットの部屋を出て、中庭にやってきたシリル達は待ちきれないといった様子のライガットに押されるまま鬼を決めるため、ジャンケンをする。

「「「「最初はグー。その次パー。グチョパはダメよ～、ジャンケンポン！」」」」

「えぇ～～（裏声」

「「フゥ。勝った」」

「・・・・・・（なんかダメな気がする」

このジャンケンをして何故かゼンマイが背中にある女の子の姿が頭をよぎったシリルであった。

「よぉ～し。三分数えるからな―」

「よし！逃げろお前ら！」

「フゥ。まぁ、やるからには勝ちにいくか」

「そんじゃ、ホズル。また後でな」

「おお。すぐに見つけてやるさ」

少しトラブルがあったが、かくれんぼが始まった。

「さて、俺は何処に隠れるかね」

シリルはライガットがグラウンドに、ゼスが食堂方面に向かっていくのを見て呟く。

「まぁ、無難に校舎の影あたりでいいかな」

校舎の人目につかないスポットを探しに向かう。

一方ゼスは・・・・・・・

「でさ～」

「なにそれ～」

カップルと思しき二人が木陰に座ろうとしているのか木に向かって歩いていた。

「ん？」

「どうしたの？」

「いや、なんか影が・・・・・・・」

男がそう言い、二人が上を見上げた。すると・・・・・・・

「「ひっ」」

「・・・・・・・」

「・・・・・・・」

校舎の近くの木の上にゼスはいた。それだけならば別段問題はないのだが、何故かその肩の上にはグラムがいる。

「「・・・・・・・・・・・・・」」

想像してみて欲しい。見た目イケメンな男が無表情で肩に黒ミミズクのヒナを乗せ、何をするでも無く木の上に座っている姿を。正直、不気味である。当然そんなゼスを不意打ち気味に見た二人は・・・・・

「「す、すみませんでした～～～～！！」」

「「・・・・・・・・・・・・・」」

謝りながら逃げていった。その間もゼスは微動だにせずいた。

一方ライガットは・・・・・

「くふふふふ。ここならば絶対に見つかるまい」

そのようなことを呟きながら、ある所に隠れようとしていた。

「シリル発見」

「あ～、見つかったか」

シリルは早速発見されていた。

「なんで分かった？」

見つかった理由が気になり聞く。

「ん？ 影が伸びてたからな」

そう言われ、自身が隠れていたところを見ると日の光が少し入り込んで、影が浮かび上がっていた。

「なるほど。隠れた時から日が少し傾いたからか」

「まぁ、隠れた場所が悪かったな。さて、次行くぞシリル」

「へいへい」

シリルをお供に加え、ホズルは次の獲物を探しに行く。

「…………なぁ、シリル」

「…………なにも、なにも言うなホズル。正直堪えるので精一杯だ」

そう言う二人は残る二人を探しに校舎のある方へと来ていた。

「・・・・・・突っ込み待ちなのか？」

「・・・・・・・（プルプル」

ホズルがそう呟くが、シリルは笑いを堪えるので精一杯という様子で木の上を見ている。

「「・・・・・・・・・・・・・・・」」

そこにはゼスが居た。もちろんグラムを肩に装備済みの状態だ。

「ゼス、見つかってるぞ？」

「・・・・・・」

「ブフッ」

ゼスが無言で木から飛び降りてきた。その様子を見てツボに入るシリル。

「・・・・・・？どうした、シリル？」

「いや、・・・・・・おま、え、カッコ・・・・・・ブフ、つけすぎ、だろ」

息も絶え絶えにシリルが言う。それを聞き少し不機嫌そうになるゼス。

「いや、格好つけているつもりは無いんだが」

「ハァ、ハァ・・・・・・フ～～。いや、ゴメン。あまりにもシュールで」

「・・・・・・ハァ」

何とか落ち着いたシリルにため息を吐くゼス。

「まぁ、シリルも落ち着いたようだし、ライガットを探しに行くか」

「よし。行くか」

「「・・・・・・」」

そうして、二人は三人（ｗｉｔｈグラム）になり、最後の一人を探しにグラウンドに向かう。

「さて、ライガットは何処にいるのかね」

「まぁ、ライガットだしどうせバカみたいな所に隠れてるんじゃないか？」

「アホだしな」

グラウンドに着き、好き放題言うシリル達。グラウンドにはゴゥレムが数台並べてあり、この後軍学部の授業があることがうかがえる。

「あ～あ。ライガットはなんであんなにアホなんだろうか？」

「ライガットだからじゃないか？」

「それ以外に理由があるわけが無いだろう」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

三人でライガットを釣るために言葉を並べる。すると、一台のゴゥレムのフェンダー（間接部と装甲が干渉して磨耗することを防ぐために付けられた布）が少し動く。

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（ニヤリ）」」」

それを見た三人は笑みを浮かべたが・・・・・・

「おい。ここで何している。ここは今から授業で使うから出て行け」

フェンダーを捲くるために近づこうとした時、教官と思しき人物が三人に待ったをかけた。授業で使うと言っているゴゥレムに近づける筈も無くグラウンドから退去させられてしまう。

「どうするホズル？」

「う～ん。とりあえず、様子を見るしか・・・・・・「何してるの？」シギュン？」

グラウンドを一望出来る所に退避したシリル達のところにシギュンが現れる。

「あ～、かくれんぼをしていたんだが、ライガットに声を掛ける前にグラウンドから追い出されちまってな」

「そう。ところでライガットは？」

「あぁ、それなら・・・・・・「ぎゃあああああ！！！」あそこだ」

シギュンに説明しようとした時に丁度ライガットの悲鳴がグラウンドから聞こえてきた。

「ら、ライガット？！」

「・・・・・・阿呆め」

「アハハハハハハ！！」

「・・・・・・」

ホズルが心配をゼスが呆れ、シリルが笑い、シギュンが怪訝な顔をする。

「た～す～け～て～くれ～～！！！」

そう言うライガットはフェンダーに必死の形相で掴まっていた。

「てか、気付いてんなら止めろよお前！」

「なんのコトか分からんな」

ライガットが教官に噛み付き、教官がそれを流す。どうやら止めるつもりはないようだ。

「こんの・・・・・・だから未だに一人身なんだよ！」

「よし、お客様はもっと激しいのが好みの様だ、もっと振り回してやれ」

教官がそう言うと、ライガットが掴まっているゴゥレムの動きが荒々しくなる。

「ウソですウソです！ごめんなさい！俺が悪かったーーー！！」

「ははは。なに、遠慮するな」

「うぎゃぁああーーー！！！」

「「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（うわぁ」」」」

ライガットのあまりに必死な形相に見ていた四人は引き気味だった。

「ん？授業が終わったみたいだぞ」

「お、ホントだ。早速迎えに行くか」

「・・・・・・・（グラムに餌やり中）」

「・・・・・・・（本読み中）」

「あ～、うん、俺とシリルで行ってくるよ」

ゼスとシギュンはライガットよりも優先順位の高いものがあったため、待機することになった。

「よう、ライガット。大丈夫か？」

「ククク。酷い顔してんぞ、ライガット」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

息も絶え絶えに突っ伏していたライガットだが、シリルの言葉を聞き、恨めしそうな顔で二人を見上げる。

「な、なん、で、たすけ、なかった・・・・・・・」

「いや・・・・・・・スマン」

申し訳なさそうにホズルは謝るが、我等がシリル君は・・・・・・・

「ライガット・・・・・・・」

「い、いや反省してくれてるなら「マジウケたｗｗ」ブッ殺す！！」

最初は申し訳ない顔をしておいて、急におちょくったような顔をしながらからかっていた。当然、ライガットはキレてシリルを殴ろうとするが・・・・・・

「あ、あれ？立てねぇ」

さっきまで一時間程ゴゥレムの地獄の振り回しを受けていたのだ、疲労で立ち上がれる筈がない。

「あれ？あれれ？生まれたての小鹿よりも頼り無い足ですことｗｗ」

「・・・・・・・・・・・・・」

「し、シリル、それぐらいにしておいたほうが・・・・・・」

それをいい事にさらにライガットをおちょくる。が、ライガットは反論せずに顔を俯けてプルプルと震えている。

「あ、あれ？ライガット、さん？」

「・・・・・・・・・・・・・・」

想像していた反応が返ってこなかったため、戸惑うシリル。悪ふざけが過ぎたか？と、思い始めた時・・・・・・

「いや、なんでもない」

「そ、そうか？たく、焦らせんなよ」

「いや、シリルもからかい過ぎてたぞ」

「うッ、スマン、ライガット。少し悪ノリが過ぎた・・・・・・」

シリルも少しやり過ぎたと思ったのか、謝罪の言葉を述べた。

「いや、いいさ。それより早くゼス達の所にいこうぜ」

「そうだな。さっさと合流しちまおう」

「あ～、腹減ったな。今晩は何食うかな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ホズルとシリルが歩き始め、雑談をし始めるが、ライガットは俯いたまま動かない。

「ん？どうしたライガット？」

ライガットが動かない事を怪訝に思ったホズルが後ろを振り向き、尋ねる。

「・・・・・・・・・・いや、なんでもない！さっさと飯食いにいくぞ！！」

「あ、おい！ライガット！」

すると、急に元気になったようにゼス達の元に向かって走り始め

る。まるで空元気のように。

「・・・・・・なぁ、ホズル」

「あぁ。なんかあったな」

二年近くも毎日つるんでいれば相手の趣味や癖などを理解するのは難しくない。例に漏れず二人もライガットの癖を理解していた。

「たく、なんでアイツはツライと急に素直じゃなくなるかね」

「まぁ、天邪鬼だからな。しかし、何があったんだろうな」

ライガットが何かに悩んでいる、というのは分かるが、その何かが分からない二人はモヤモヤしたものを感じる。

「どうせアイツの事だ、聞いても正直に答えないだろう」

「そうだな。結局アイツが話してくれるまで待つしかないのか・・・・・」

自分達が何も出来ないことに悔しさを感じながら、二人はゼス達のいるところに向かって歩を進めた。

１０話　たまに子供のする遊びをすると楽しく感じる．．．．．気のせい？（後

どうも、ｓｕｇａｒｌｅｓｓです。今回は少し早めに投稿できました。

さて、アッサム国立士官学校編も後半部分は少しキンクリするつもりなので、終わりに近づいてきました。

そして始まる、王国騎士編。いやー、学生時代が結構長引きましたが、漸く作者が書きたいところまで来ました。

予定としては後一，二話ぐらいで学生編を終わらせて王国騎士編に入りたいと思っています。そこからが本番のつもりなので頑張っていきたいです。

では、また次の更新で会いましょう。

11話　別れは突然に

「辞めるだと！？ライガット！！」

何時ものように皆で集まり中庭で雑談でもしようかとしていた時にそれは起きた。

「石英を使えない貴様が二回進級出来ただけでも奇跡なんだぞ！？ここで辞めたら貴様を影で蔑んでいた奴らの思惑通りだろうが！！」

ライガットが急に一週間後に学校を辞めると言い出し、それに納得がいかないゼスが怒鳴る。

「金銭的な理由からだ。仕方ないだろう」

ライガットに詰め寄っていたゼスの腕を掴み、そう諭すホズル。

「・・・・・・チッ」

未だに納得がいっていないという顔で腕を振り払い、踵を返すゼス。それを困ったように見送るライガット。

「しかし、シリルは何も言わないんだな」

ゼスが去った後にシリルに向かって問いかけるライガット。一見落ち着いているように見えるシリルだったが、その内心は荒れに荒れていた。

「いや・・・・・・理由が理由だ、仕方無いだろう。ホズルは知っ

ていたのか？」

しかし、それを誤魔化し話題を変えるシリル。

「いや、俺も今朝聞いた。それが聞いてくれよシリル。俺が親父に頼んで金を工面させる、って言ったらコイツ何て言ったと思う？」

「わッ！バカやめろ！！」

ホズルが嬉しそうな顔で言おうとすると、顔を赤くしたライガットが必死で声を上げて遮ろうとする。

「『親父の教えでな『借金取りからは踏み倒しまくっても友達からは本気で借りるな』ってさ』って言ったんだよ」

「うぎゃぁぁぁぁぁぁぁ！！クッセーーーー！！！！」

「そう言うなって。俺は嬉しかったぞ？」

そんなやり取りをしている二人を見ながらもシリルの考えは別にあった。なんで忘れていたのだ、と。俺が覚えていればライガットが退学することはなかったのではないのか、などと自虐的な思考に陥っていた。

「・・・・・・・・・・・・シリル」

「ん？どうしたシギュン？」

しかし、それを表に出さずに声を掛けてきたシギュンに返事をする。シギュンは少し迷ったようなそぶりの後に言う。

「・・・・・・・・・・・・・なにかに悩んでいるなら私に頼って」

「え？」

自分では上手く隠せていたと思っていただけに、その驚きは大きかった。

「別に俺は悩んでいないよ？」

「・・・・・・・・・・・・・そう。でも、辛くなったらいつでも言ってね」

それでも隠そうとするシリルに少し悲しそうな顔をした後にシギュンはそう言い、踵を返す。それに慌てて声を掛けようとしたシリルだったが。

「なぁ、ライガット」

「どうしたホズル？」

「シリルとシギュンをほっとくといつもアウェーになる気がするのは気のせいか？」

「心配すんな俺もそう思ってた」

後ろからその様な声が聞こえてきたため声を掛けるに掛けられなくなってしまった。

「あ～、別に忘れていたわけじゃ・・・・・・」

「「嘘吐け」」

シギュンを追いかけたい気持ちを抑えながら振り向き、弁解しようとしたシリルだったが見事に声をハモらせながら返された。

「ったく、俺達のことはいいからシギュンを追いかけたらどうだ？」

「ああ、俺達のことは気にせず行けばいいじゃないか」

若干拗ねたように言ってくる二人に感謝しながらシギュンを追いかけることに決めたシリル。

「悪い！ライガットこの事については後で話そう」

「おう。じゃあ、明日の朝飯ん時にでも話そうぜ」

ライガットの言葉に振り向かず、手を振ることで返して走り去るシリル。

「って言うか、シギュンが見当たんねぇ・・・・・」

シギュンを追いかけてきた筈のシリルだったが、この時シギュンが忘れ物を思い出し、校舎に足を向けたことを知る由も無かった。

「でも、シギュンを追いかけてきたのは良いけど何を言うつもりだったんだろうな俺は」

自分がシギュンに追いついても何を言えば良いのか分からないシリルはそうぼやく。

「正直、前世の記憶があるとか言えねぇしなぁ」

一人ブツブツと呟きながらもシギュンの捜索は止めないシリル。しかし、考え込んでいるシリルは女子寮の前で待ち伏せすればいいだけだと気付かない。

「うん。とりあえず事実を少しぼかして言ってみよう」

方針が決まって少しスッキリしたような声をあげて頷くシリル。

「そうと決まれば早速シギュンに会わなければ・・・・・・」

しかし、この時既にシギュンは女子寮に入ってしまっており、少なくとも今日は会えない事をシリルは知らない。

その後、暗くなっても暫く探し続けてから女子寮の前で待ち伏せすればよかった気付いて叫び声をあげるのはまた別の話。

「おはよう」

「「お、おはよう」」

翌日、朝の挨拶をするシリルだったが、その顔は幽鬼のようだったため返事がどもってしまったライガットとホズル。

「顔が凄い事になってんぞ」

「ど、どうしたんだシリル？」

二人がそう聞くも・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・あぁ。シギュンと話せなかった」

「「そ、そうか」」

それ以上は聞く気になれず、同じ様な返事をする二人。

「ん？ところでゼスは？」

朝食を食べ終え、幾分か落ち着いた様子のシリルが聞く。

「ああ、あいつはまだ納得いってない様子でな」

ホズルが少し呆れ気味に言い、ライガットは少し困ったように笑う。

「・・・・・・そうか。で、ライガットいつ出発なんだ？」

「ん？そうだなぁ・・・・・・準備とかも含めて一週間後に出発しようかと思ってるよ」

それを聞き早すぎると思うシリル。

「いささか早過ぎないか？」

「いや、本当ならもっと早くに言うつもりだったんだが・・・・・・」

「だが？」

そこで言い辛そうに口ごもるライガットを急かすシリル。

「言い辛くて黙ってました・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・」

悪い事をして咎められる子供のような態度に呆れが先に来てしまい何も言えなくなるシリル。

「まぁ、今更言ったって仕方が無い。それよりかそろそろ遅刻してしまうぞ？」

「あ！待てよホズル！！」

「・・・・・・・・・ハァ。まぁ、いいか」

それを見かねたのか、時間を本気で気にしていたのか会話を打ち切るホズル。それがきっかけとなりこの場はお開きとなった。

そうして一週間が経った。今日がライガットとのお別れとあってか何時もより機嫌が悪いが、この一週間シギュンと全く話せていないことが、さらにそれを加速させていた。

「……………………」

ここはアッサム国立仕官学校軍学部。現在ゴゥレムの実習訓練を行っているのか、生徒達と十数台のゴゥレムがいた。

「……………………」

しかし、何時もならもう少し活気があるはずの訓練場は不自然な程静まり返っていた。その雰囲気を作り出しているのは、何故かいたく不機嫌なシリルである。

「……………………」

件のシリルは丁度ゴゥレムに乗り込むところであり、何故かその光景を眺めている生徒……いや、むしろ教官が生唾を飲み込んでいる。

「し、シリル？お、落ち着いて動かすんだぞ？」

「・・・・・・・・・・・了解」

何時もはハキハキと指示を出す教官がまるで猛獣に触るかのように慎重に言う。それに返すシリルだが、その言葉を返す前の不自然な間に不安を感じる教官である。

そして、ゴゥレムを動かし始めるシリルだが、少し動きが荒々しい以外には特に変わった様子は見られない。そこで何故全員が緊張しているかと言うと・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・目標ダミーを有効射程に確認・・・・・・目標を破壊する」

そう呟くと同時にゴゥレムの走るスピードを上げ、手にした実戦で使用するような石英製の剣で実戦を想定して石英で作られたダミーに切りかかる。

「・・・・・・・・・・・・・・・」

しかし、訓練をしながらもシリルはどこか上の空であった。この一週間はこのようなことが多く、今回も例に漏れなかった。それでも流石は軍人候補だけはあるのか殆ど無意識下でゴゥレムを動かすシリル。

だが、普段意識して魔力を抑えながら操作しているシリルである。力加減を忘れたままダミーを切り裂こうと力を入れるが・・・・・・

ブチィ！！！

当然許容量を超えた指示を受けた石英靭帯は千切れる。その千切れる音を聞き絶望の表情を浮かべる教官と生徒達。いや、生徒はまだいい。しかし、教官は絶望した表情で突っ伏し、何かを延々と呟き続ける。

それも当然であろう、なんせこの一週間でとても安いとは言えないゴゥレムの石英靭帯を全身ではなく一部とは言え三台分、計十五本も千切られたのだ。教官の胃はストレスでマッハである。

「・・・・・・あ。またやっちまった」

そこに至り漸く我に返るシリル。本人も気をつけようとしているのだろうが、如何せん少し遅かった。そしてそこで丁度良く授業が終わる。

「では、教官。今日は用事があるので先に行きます」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

普段はこんな事をしようものなら鉄拳制裁が待っているのだが、一応事情は知っているのと次期国王（ホズル）の学友として認知されているため他と比べて甘くなっているのもあるので教官は無言を通す。

「おーい！ライガットーーー！！！」

辺りが赤く染まりだした頃に校門でホズルと別れの挨拶をしているライガットに向かって走りながら声をかける。

「お、シリルか。今までありがとうな」

「・・・・・・・・　ああ。お前こそ元気にやれよ」

何時ものような態度のライガットが手を差し出し、少し泣きそうになっているシリルがそれに応えるように手を差し出し、しっかりと握手をする。

「じゃあ、そろそろ行くな」

「ああ。困った時は頼りに来いよ」
「次はいつ会えるか分からないけど、また会おう」
そう言って校門を出て行くライガットを二人で見送る。

「・・・・・・・・行っちまったな」
「・・・・・・・・ああ」
ライガットの姿が見えなくなった頃にシリルがそう呟き、ホズルが応える。二人とも少し鼻声なのはお互いにスルーしている。
「そろそろ戻るか・・・・・・・・ん？どうしたシリル？」
そう言って踵を返すホズルだったが、動かないシリルを不審に思い足を止める。
「いや、俺はもう少しここにいるよ」
「ん、そうか。じゃあ俺は先に戻っているぞ？」
「ああ」
そう言うシリルに特に疑う素振りも見せずに寮に戻っていくホズル。それを見てもう少し疑うとかないのか、と思うシリルだったが、

信頼されているのかと思い少し嬉しくなった。

暫く校門の影に佇んでいたシリルだったが、バイクの音が聞こえてきたので、背にしていた校門から背を離してバイクに乗っている人からも見えるように立つ。

「・・・・・・・・・・・シリル？！」

そのバイクに乗っていたゼスが驚いたような声をあげる。

「よっ。ライガットの見送りご苦労さん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・なんのことだ」

俺がゼスにそう言うと、自分のバイクを降りながら不機嫌そうな声でそう返す。しかし、三年近くも殆ど毎日一緒にいる俺達から見れば照れ隠しにこの様な態度を取っているのだと分かる。

「だから～。ライガットの見送りはしたいけど、あんな対応してしまって気まずい上に恥ずかしかったから態々学校から離れた所まで見送りに行ったんだろ？」

「…………………………………………ああ」

そっぽを向きながらも、ゼス自身誤魔化しきれないとは思ったのか相変わらず不機嫌さを装ったままだったが、返事を返してくる。

「ふふ。そうか」

「…………………」

ゼスの相変わらずの堅物具合に思わず微笑みが漏れるシリルだったが、ゼスは嫌そうな顔をしてバイクを押していってしまう。それを見て、自分を置いていくつもりは無いようだと判断し、横に並ぶシリル。

「……………寂しくなるな」

「………………………ああ」

そう言ったっきり会話が途絶える。二人はそのまま無言で寮に向かって歩を進めて行った。

１１話　別れは突然に（後書き）

どうも、ｓｕｇａｒｌｅｓｓです。前々から興味があった予約投稿を試して見たり。

今回はライガットが退学し、学生編が終わりに近づいてきました。後一話で学生編が終わり、王国騎士編に入っていけるかと思います。

ちなみに一人オリキャラを出したいのですが、どうでしょうか？よっぽど反対意見がでない限りは出す予定です。

今回の話は中々書くのが難しく、最後にシリルとシギュンを持ってくるつもりだったのに気付いたら・・・・・ゼスェ。

では、次回の更新で会いましょう。

12話　出会い

「軍学部主席！ゼス＝アルノルド！」

「はッ！！」

ライガットが中退してから月日は流れシリル達は卒業式を迎えている。

「次席！シリル＝ラカン！」

「はッ！！」

シリルとゼスはそれぞれ次席と主席として壇上に上がっていった。

「いや～、ついに卒業か。なんか感慨深いな」

式が終わり何時もの四人で集まり、シリル達は学生としての最後の会話を楽しんでいた。

「そうだな。そういえば、お前達はこの後どうするんだ？」

ホズルが他の面々にこの後の身の振り方について聞く。以前にもこの様な話題はあったが、確認みたいなものだろう。

「俺はお前の軍で厄介になるかな」

シリルはクリシュナ王国の魔動戦士になるつもりは変わらないようだ。

「私はシリルがそうするなら魔動技術師になる」

ライガットが中退することになった時にひと悶着あったが、いつか話してもらえるまで待とうと決めたシギュンのシリル依存度は相変わらずのようだ。

「・・・・・・俺は兄さんを止める役になりたい。だから軍に志願するつもりだ」

そう言うゼスは迷ったような間があったが、決意を秘めたような目をして言い切る。

「そうか。俺はどうするかな」

「おいこら皇太子。お前は玉座を継げ」

「な？！シリルお前まで父上や大臣みたいな事を言うのか？！」

「いやそれ当たり前だから。周りの人達のためにも継いでやれよ。てか、継げ」

どこぞの皇太子様が血迷ったような事を言い始めたので、それに突っ込むシリルだったが、予想以上に祖国の現王と大臣が苦労してそうだったので、突っ込みがいささか乱雑になってしまった。

「イヤでござる！ゼッタイに継ぎたくないでござる！！」

「バカ野朗！」

「ぐはぁ！」

ホズルがネタに走りシリルがホズルを殴り飛ばす。

「お前が継がないで誰が継ぐって言うんだ！」

「え？妹？」

「歯ぁ食いしばれ！そんな大人、修正してやる！！」

「グフ！」

兄とは思えない言葉にさっきより少し強めに殴るシリル。冗談なのだが、そこは腐っても軍学部次席。割と洒落にならないダメージを与えている。ちなみにリックドムは関係ない。あくまでも呻き声である。

「お前以外にいないだろう？！」

「・・・・・・くッ！そんな世界間違っている！」

「…………………………………ねぇ？」

「…………………………………なんだ？」

「…………………………………なにこれ？」

「…………………………………知らん」

そんなふざけたやり取りをする二人を余所にシギュンとゼスが一歩引いたところから無表情でその光景を見ていた。

「さて、それじゃあそろそろ行くか」

それからシリルとホズルのじゃれあいが終わり、四人で話していると出発の時間が来てしまったため、そう切り出すシリル。

「ああ。そろそろ迎えを待たせる訳にはいかんしな」

「ホズル少しお願いがあるんだが」

「ん？　なんだ？」

さて、出発というところでシリルがホズルに待ったを掛ける。

「いや、シギュンをお前んところの籠に乗せてってくれないか？」

「え？！」

そう提案したシリルだったが、ホズルが返事をしようとする前に脅威のスピードで反応したシギュンがそれを遮る。

「な、なんで？シリルのバイクがあるじゃない」

「ああ、少しアッサム内を見て回りたくてね。流石にシギュンを連れて回るのは危ないし」

ここまで過剰に反応したのは密かにシリルとの二人でのバイクの旅を楽しみにしていた、というのが大きいのだがそれを知らないシリルは何でも無いかのように返す。

「…………………………………………そう」

「ど、どうした？」

「……………………………………………………………………何でもない」

当然そのような反応を返されても嬉しくなるはずが無く、無表情な顔をして平坦な声で言葉を返すシギュンがいた。

「そ、そうか。じゃあ、ホズル頼めるか？」

「…………………………ああ」

どこか拗ねたような雰囲気を出しながら返事をするシギュンを見て二人で籠の中という密室空間に放り込まれるのに抵抗を覚えるホズルだったが、あまり頼み事をしてこない友の願いを叶えたいというのもあり、悩んだ末に了承した。

「じゃあ、シギュン。先に村に行って待っててくれ」

「…………………うん。なるべく早く帰ってきてね」

「もちろんだ。気になることを調べたらすぐに帰るよ」

「………じゃ、じゃあ暫く会えないから、き、き、キス………して」

「…………………シギュン」

シリルはシギュンをそっ、と壊れ物を扱うかのように抱き寄せる。

「……………シリル」

シギュンは頬を微かに染め、シリルを見上げる。そんな二人は既に自分達の世界に入っており、周りが見えていない。

「……………なあ、ゼス」

「…………………分かっている。何も言うな。そして

耳も塞ごう。音が生々しすぎる」

「・・・・・・・・・・・・・・・・はぁ。あいつら人前だって分かているのか？」

護衛の人達とひと悶着あったが、ホズルとシギュンは国から迎えに来ていた馬籠車のようなバイクと護衛のバイク十台でビノンテンに向かう途中にある俺達の村に向かって出発した。

「じゃあなシリル。また会おう」

ゼスが自身のバイクに跨りながらシリルに言う。

「ああ、また会おう。・・・・・・・・できれば戦場以外で、な」

「ん？なにか言ったかシリル？」

「んにゃ、なんでもないよ」

最後は呟くように言ったため、ゼスの耳には届かなかったようだ。

「そうか。じゃあ、そろそろ行くぞ」

「ああ。結婚式には呼べよな」

シリルの言葉に苦笑しながらも分かったよ、と返事をしてバイクを走らせていってしまった。

「さて、一回アッサム王城を見ておくか。ついでにクリシュナ方面からアッサムに侵入するときにゴゥレムの大部隊が通れそうなとこ

ろを見て回らないとな」

そしてシリルは密かにまだ誰も知らない未来のために準備を進めるのだった。

「さて、主要なところは見て回ったかな？」

出立してから二週間ほど経ち、王都や主な砦を見て回ったシリルはクリシュナに向けてバイクを走らせていた。

「後は予想できる進行路を確認しておけばいいかな？」

この後の予定を建てながら日も沈んできた事だし、近くに村があったら留めてもらうか、と考えるシリル。荒野が目立つ場所では正直野宿は厳しいものがある。

「お？噂をすれば丁度いいところに村があるな」

村の前まで行き、シリルはバイクを降りる。少し柵が建っている以外は小さな村で渓谷の入り組んだ場所にあることを考えると未登録の村なのかもしれないと考えるシリル。

「すみませーん！」

柵に申し訳程度に設けてある門の傍に立っていた見張りと思しき村人に声を掛ける。

「ん？なんだお前は」

「旅をしているんですが、少し迷ってしまいまして。今晩・・・・・・いえ、少しバイクの整備をしたいので三日程留まらせて頂けませんか？」

一夜を明かす程度でいいかと考えていたシリルだったが、二週間もバイクの整備を碌にせずに走りっぱなしだったため予備のタイヤも含めて擦り切れている上に、靭帯の疲労が些か無視できなくなっていたのを思い出し、ここで整備出来ないかと少し期限を延ばすシリル。

「・・・・・・ちょっと待ってろ。村長に聞いてくる」

そう言って二人いた内の一人が村の中に向かって走っていった。

「おい。村長がお呼びだ」

「ん？留めてくれるのか？」

暫く門の前で待っていると、先ほど村の中に消えていった村人が戻ってきた。

「それは分からん。とりあえず俺は村長にお前を呼んでこいと言われただけだ」

「そうか。じゃあ、悪いが案内を頼む」

門を抜け暫く村の中心に向かって歩を進めると、他の家と比べて大きな家が見えてきた。おそらくあれが村長の家なんだろうとシリルが考えていると先導していた村人が振り向いてきた。

「目の前に見えるのが村長の家だ。失礼の無いようにな」

「・・・・・・ああ」

一瞬、何様だコラ？とか思ったがそれを表に出さずに返答してから家の中に入るシリル。

「お主が件の旅人かね？」

家の中に入ると大きなリビングと思しき場所が目に入った。そこにはいかにも村長です、と言わんばかりな老人がこれまた無駄に大きな椅子の上に踏ん反り返っていた。

「はい。すでに聞いているとは思いますが、暫しの間村に留めて頂きたいのです」

この手の老人は無駄に自尊心が強いので敬語をつかって接する。

「ふむ。それは構わんが・・・・・・・」

一応了承の返事をした村長だが、その目は明らかに金品を要求していた。目は口程に物を言う。

「ええ、分かっていますよ。これで大丈夫ですか？」

無償で泊まるのは流石に虫が良すぎるので幾ばかの金品を渡す。

「おお。それでは泊まる所は自分で探してな」

ん？

「・・・・・・すいません、それはどういう意味ですか？」

「じゃから村人に自分で頼んで泊まる所を確保しろと言っておるんじゃ」

意味が分からなかったので聞き返すと村長は苛立ったようにそう返す。

「・・・・・・・・・・・・・・・分かりました。それでは暫くの間厄介になります」

そう言って村長の家を出る。

「ありえねーーー。金払ったんだから村長の家に泊めるのが普通だろ」

村長の家を出てから村人に泊めてもらえないかと聞きに回るシリルだったが、排他的な村なのか聞く人全員が首を横に振るので愚痴が口を吐いて出てしまう。

「とはいえ、もう全部回っちまっただろうし」

村の中にある家を一通り回ってしまい途方に暮れるシリル。

「ハァ、今日も野宿か・・・・・・・・・・・・ん？」

金まで払って結局野宿になるのかと落ち込むが、村から少し離れたところにもう一軒家があるのを発見し、そこに向かうシリル。

「にしても、何でこんなに離れてる上にこんな門なんかあるんだ？」

シリルが疑問に思うのは目の前に聳える外側から閂を掛けるタイプの石英製の頑丈そうな門である。正直村を守る柵など比べ物になりそうも無いほど立派だ。

「ここもダメだったら野宿しかない・・・・・・・・・・いくか」

疑問に思う事は多々あるが、ここしか残っていないので閂を外し、中に入る。

「・・・・・・・・すごいな」

シリルは目の前の家を見てそう呟く。家は決して大きいと言えるものではないが、背に傾斜が急な山が聳え家を扇状に囲むように設置された先ほどの門が異常さを際立たせる。

「・・・・・・・・・・それにしてもこれは」

そうまるでなにかを閉じ込めようとしているような・・・・・・

「これはなんか訳アリかな？」

「ちょっと待った！！」

そう一人呟いた時先程の村長が息を切らせながら、数人の槍で武装した村人を伴ってこちらに向かってきた。

「どうかしましたか？」

「すまんがここはダメじゃ」

そういう村長を訝しくい思うが、村長と護衛の目には明らかに恐怖の色があった。

「ここになんか居るんですか？」

「・・・・・・・忌み子じゃ」

「忌み子ぉ？」

返されえた言葉が想像していなかったものだったので素っ頓狂な声を出してしまった。

「ああ、そうじゃ。あのような恐ろしい容貌をした奴をワシはアイツ以外に見た事がない」

そう言う村長は本当に気味が悪そうにしていた。

「ふーん。まぁ、いいや。それでここの人が許可出してくれたら泊

まっていいんだろ？」

正直少し泊まるだけなのでどうでもいいことだと判断し、村長に声を掛ける。

「んな？！話を聞いておったのか？！」

「俺は余所者なんだから別に構わないだろ？」

そういうと面倒臭そうな顔になり、おざなりに言葉を返してきた。

「ふん、どうなっても知らんぞ」

そう言って踵を返そうとした村長だったが、村人の手に持つものを見て思い出したようにこちらに向き直ってきた。

「それならばこれもついでに運んどいてくれ」

そう言って手渡してきた物はパンと野菜と少量の肉と数冊の本だった。

「これは？」

「あやつの晩飯じゃ」

そう言う村長だったがシリルはその行動を疑問に思った。

「なんで忌み子にちゃんとした飯を与えんだ？」

「・・・・・・・ あやつの親がワシの息子だったからじゃよ」

その言葉を聞き益々分からなくなるシリル。

「なら、なんでソイツをお前が育てない？」

「・・・・・・・気味が悪いのじゃ。どうしようもなく恐ろしいのじゃよ」

そう言う村長の目には僅かばかりの罪悪感が見て取れた。

「ソイツの親は死んだのか？」

「ああ、二人とも自分達の生んだ子供が忌み子だという事に心労を感じすぎたせいで死んでしまった」

「そうか。まぁ、俺はここに泊まるとするよ」

「勝手にしろ」

それを聞くとシリルは踵を返し家に向かう。村長と村人も門から外に出て行き、閂の閉まる音がした。

「さて、忌み子とやらは一体どんな奴なんだろうな」

シリルは家の扉の前に立ちノックのする。暫くすると扉が開いて中から中学生ぐらいと思われる女の子が出てきた。

「・・・・・・・・・・・・・・・誰ですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

その言葉にシリルは反応出来なかった。その子があまりにも奇怪な姿だったから？醜女だったから？女の子とは思えないほどムキムキだったから？否、あまりにも美しかったのだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・どうしたんですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・ハッ！ああ、いやすまない。あまりにも綺麗だったんでな」

少し警戒しながらこちらを見てくる少女は恐ろしいほどに整った容姿を持ち、碧銀の髪と左右の目がそれぞれ右目が紺、左目が青のオッドアイが特徴的だった。

「何言ってるんですか？私は恐ろしい容貌だって言われてるんですよ？からかうのは止めてください」

シリルの偽らざる本音は長年忌み子として扱われていた彼女にはたちの悪い冗談に聞こえたらしく、無表情から不快そうな表情になった。

「冗談ではないんだが。まぁ、今はいいか。いきなりだがここに泊めてくれないか？」

「何でですか？」

当然、見ず知らずの男から自分の家に泊めて欲しいと言われたら警戒するのが普通だ。

「実は旅をしていてね。この村に留めて貰える事になったんだが、

なにぶん泊めてくれるところが無いと来たもんだ。そこで最後に残ったのが此処って訳だ」

「・・・・・・・・・・・・・・・ 旅ということは色々な場所の話とかありますか？」

旅人というところに興味を示したが、どうやら村の外の話が聞きたいようだ。

「そこまでいろんな所を知っている訳では無いけどな」

「そうですか」

そう言って考え込み始めてから暫くして少女が顔を上げる。

「分かりました。では此処に滞在している間に外の話を聞かせてくれるのであれば」

「それ位ならお安い御用だ。そんじゃよろしくな」

家に泊めてくれる事になり、今まで断られ続けていた事もあってか嬉しくなり手を差し出すシリル。その差し出された手を見て不思議そうな顔をする少女。

「なんですかこの手は？」

「ん？握手だ。知らないのか？」

一応一般的な挨拶だと思ったんだが、と考えるシリル。軍学部では武器を持たない事を示すため最上級の挨拶だと教わったんだが、

とも考えていた。

「いえ、握手は知ってますが」

「じゃあ、ほら」

そう言って少女の手を自分から掴むシリル。小さな手だなぁ、とか思っているがロリコンではない。少女を見て見ると不思議そうな顔をしていた。

「どうかしたか？」

「・・・・・・・・・・いえ」

何か言いたそうだったが、言うつもりは無いようだったので、深くは詮索しないほうが良いだろうと追求を避けるシリル。

「そういえば、挨拶がまだだったな。俺はシリル＝ラカンだ」

「私は・・・・・・・」

自己紹介がまだだったのを思い出し自身の名前を伝えるシリル。少女は少し躊躇うような素振りを見せた後自身の名前を告げた。

「私はアインハルト＝ストラトスです」

１２話　出会い（後書き）

どうも、ｓｕｇａｒｌｅｓｓです。
更新が遅れて申し訳ないです。ただ、これからも作者の都合で遅くなると思われますが、見捨てないで頂けると幸いです。

ゼスの姓名が分からなかったので捏造しました。アテネス側って姓名が分からない人って多いよね。
原作ではホズルに兄が居るんですが、邪魔だったのでこの作品ではいない設定にしてしまいました。
まさか、ホズル君の兄が大好きだって言う人はいない・・・・・・よね？

さてさて、今回オリキャラを出すための回だったのに某覇王っ子が出てきました。
いや、作者の考えていたキャラがかなりアインハルトと被ってたんですよ。
まぁ、魔法とかは世界が違うので出来ませんので安心してください。

感想が頂けると更新速度が上がるかもしれません。

では、次回の更新で会いましょう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2273s/

ブレイクブレイド～力をもつ異端者～

2011年7月11日18時04分発行